

42248

教科書文庫

| |
|---------|
| 4 |
| 810 |
| 42-1928 |
| 200030 |
| 1903 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

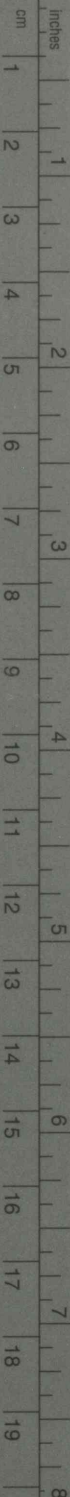


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

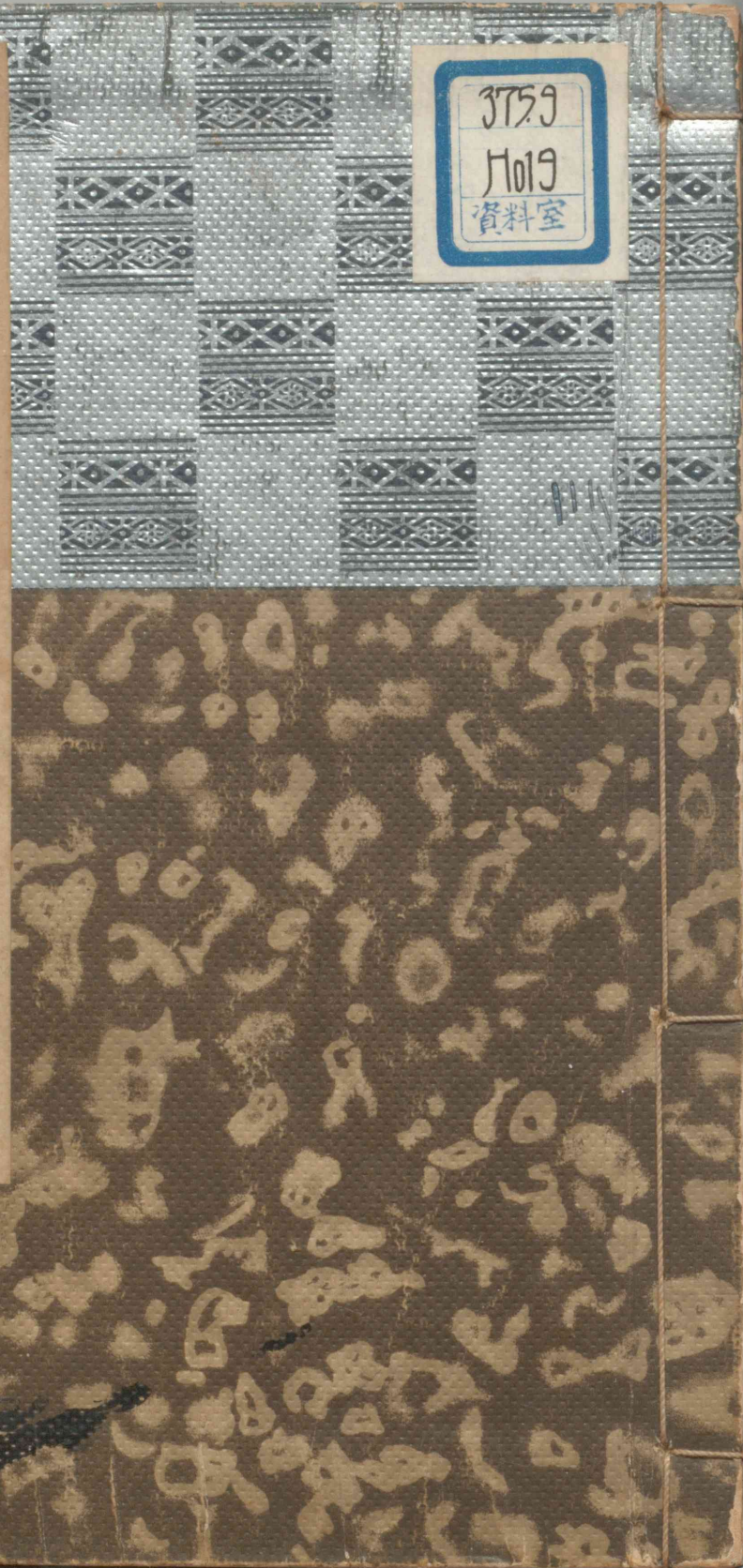
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
No.19
資料室

昭和女子國文讀本
卷三



375.9
H019

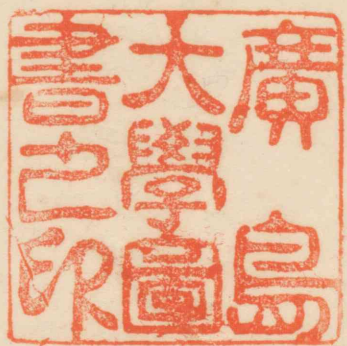
資料室

日八十月二十年三和昭
濟定檢省部文
用科教科語國校學女等高

保科孝一編

昭和女子國文讀本

東京
會社育英書院發行



昭和女子國文讀本 卷三

目次

| | | | |
|---|---------|------|----|
| 一 | 麗かな春 | 金子薫園 | 一 |
| 二 | 〇峠の茶屋 | 夏目漱石 | 七 |
| 三 | みやげ | 西條八十 | 一三 |
| 四 | 〇シシリ島の春 | 九條武子 | 一五 |
| 五 | 水の都 | 大類伸 | 二〇 |
| 六 | 〇勿來の關 | 熊田葦城 | 二八 |
| 七 | 花の備忘録 | 生田春月 | 三一 |

目次

--

八 四國遍路……………萩原井泉水……………三九

九〇 淨瑠璃寺への道……………和辻哲郎……………四七

一〇 一萬米……………土岐善麿……………五六

一一 二宮尊徳と妻……………留岡幸助……………六二

一二 旅と歌と……………佐々木信綱……………六九

一三 〇奈良の初夏……………大類 伸……………七六

一 若草山……………七七

二 春日野……………七九

一四 壺の思出……………佐藤功一……………八三

一五 〇金剛山の景勝……………菊地幽芳……………九一

一 萬物相……………九一

二 水簾洞……………九七

一六 〇山 寺……………若山牧水……………一〇二

一七 大島の旅から……………大村嘉代子……………一一一

一八 雜 草……………與謝野晶子……………一二七

一九 涙の泉……………徳田菊枝……………一九

二〇 お茶の客……………土岐善麿……………一二五

二一 夏の小暦……………田山花袋……………一三八

二二 蜀山人の盆燈籠……………饗庭篁村……………一四三

二三 藪 入……………島崎藤村……………一五〇

二四 太閤と曾呂利……………湯淺元禎……………一五三

二五 木村重成の妻……………海上龍子……………一五八

二六 宇治川の千鳥……………前田 晁……………一六二

二七 伊豆半島その一……………志賀重昂……………一六九

二八 伊豆半島その二…………………………一七四

二九 蘭學事始……………菊池 寛……………一八一

三〇 蓮の花……………北原白秋……………一八八

昭和女子國文讀本 卷三



一 麗かな春

四月はうるはしいものの纏つた感じのする月である。天地に満ちる春の光、春の花といふ花は皆咲匂うてゐる。はかない小草の末までも細かい花をつけて、融けるやうに春の日に煙つてゐる。誰の顔を見ても、のんびりと平和さうに見える。しかも平和な動搖ともいふべきものが、その中に起つて来る。それは咲満ちてゐる花に風が

あたつて、靜に搖りうごかすやうな輕さである。何がなしに胸のうちに起る不安である。家にぢつとしてものを考へてゐることが出来ない、靜な中に動いてゐる四月の天地は、絶えず人間に何事をか思はせる。郊外に出て春草を踏む心持には特殊な味がある。夕ぐれなどに草原を歩いて、濕つてゐるやうな柔さを履物の裏に覚え、又爪先に感じられる時、身にしみわたつて來る心持は、懐しい寂しみである。一步、又一步、夕ぐれの氣がだん／＼迫つて來る時、ひとりといふ感じに伴なふ慰安を覺える。身のまはりには誰一人ゐない。たゞ若草と自分ばかりである。懐しい寂しみは、身にしみわたつて、

聲を放つて泣かしめるばかりである。

懐しい寂しさといふ心持を今少しいひたい。あたりは薄暗くなつても、春草の原は盡きない。草はます／＼濕つて、足を擧げるのが重いやうな氣がする。歩けなくなつて倒れたら、自分も草になつてしまひはしないか。「草むす屍」といふことがある。生ける屍のやうに身が動けなくなつたなら、草になるのはあたりまへである。動けるだけ歩いて、動けなくなつたら草になるまでだ。非常に靜な心持になつて來る。人間の胸の中が圓滿になつて靜まりきれば、その時は死だ。ふうと草の上に倒れて、草になつて、その草を誰か踏んで、その人が又草になる。

又踏んで草になる。自分の今踏んでゐる草は、誰が倒れて草になつたものかといふ風に、それからそれと考が進んで行つて、はてはもつれてしまふ。咲満ちてゐる花の蔭は、一種特別な感じを與へるものである。晝の感じが特に際やかである。融けるやうな日光を一ばいに浴びて、眞盛の花がそよとも動かないでゐる姿を、その蔭に立つて見てゐる心は長閑な和いだといふ氣持ではなくて、それから春の寂しみを受ける。見てゐて、術ないやうな氣がする。花が散出せばこの感じは破られるが、咲ききつてなすべき事をなし終へたといふさまを見せつけられる寂しさは、不安の情を伴なうて來

る。朝の花蔭、夕の花蔭、夜の花蔭には、かうした特殊な感じがなない。四月の日光に包まれるすべての物の麗かに穩かなのを愛しながら、心の底にはこの不安の情を拂ひのけることが出來ない。春の寂しさを落花に觀て表した思想は、佛教の無常に根ざしてゐるが、私は却つて、落花は美しい華やかなものに觀たい。はらくと空に舞ひ地に散りしく軽いしなやかな氣分は、美しいと見えても、寂しいとは思はれない。又風も



香川景樹
江戸時代の
歌人の末
保十四年
年七十六

ないのに數へるばかり散つて來る姿からは、靜かだといふ感じを受けるが、寂しいといふ氣はしない。香川景樹が詠んだ、

梢ふく風もゆふべはのどかにて

かぞふるばかりちる櫻かな

の歌の中に籠められた作者の心持は、三句の「のどか」である。寂しい感じを覺えないのがあたりまへである。

咲ききつて、そのあとはもう散るばかりだといふあはれは、身にしみるものがある。軽い旋律を持つてゐる落花の姿は、それが直に音楽美である。ちよつとそゝられるところはあつても、それは心のうはべを流れるに過ぎない。

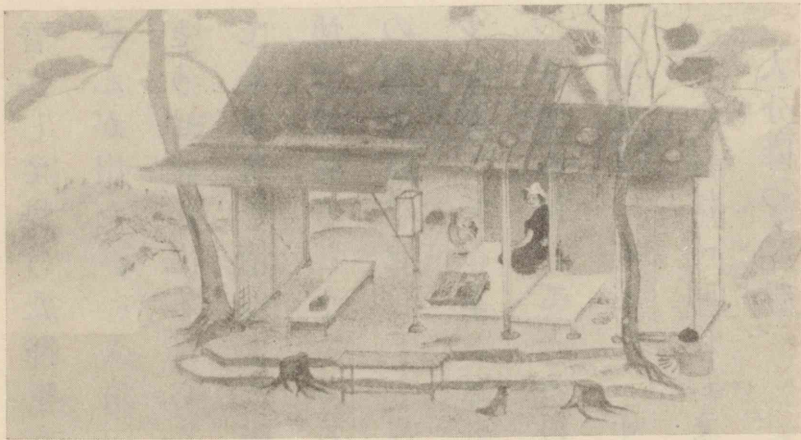
い。私は散る花を見るのが好きで、靜な春の日に散りかかる軽い快い感じの奥に、何物かを見出すことを好まない。花の散つたあとの木蔭は、靜な、うら安い氣持をしんみりと抱かせる。私は晩春ぐらゐしつとり氣の落着く時はないと思ふ。又四月の末頃の自然ぐらゐ、人間の心に安息を與へる時はなからう。
(金子薫園―自然と愛)

〇二 峠の茶屋

おいと聲を掛けたが、返事がない。
軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。

金子薫園
名は雄太郎
歌人

五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子だ菓子の箱が三つばかりならんで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。おいとまた聲をかける。土間の片隅に寄せてある臼の上うへにふくれて居た雞が、驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈ドベツツヒが今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。幸ひ下は焚きつけてある。返事がないから、無斷でずつと入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏はねうきをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬけ



(巻繪枕草) 茶の峠屋

る氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には、一升柀程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に収まる。しばらくすると、奥の方から足

音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るにはきまつてゐる。しかし、自分の店をあげ放しても苦にならないと見える處が、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、さぞ御困りでござんしよ。おゝ、大分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ／＼と二聲で雞を追下げることゝ、と駈出した雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆くりへきの上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの

梅の花が三輪、無造作に焼きつけられて居る。

「御菓子をと、今度は雞の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくま
る。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫し
ながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」
「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の中がぱち／＼と鳴つて、赤い火が颯と風を起し
て一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。さぞお寒かる。」

と云ふ。軒端を見ると、青い煙が、突當つて崩れながらに
微な痕をまだ板庇にからんで居る。 (夏目漱石—鶉籠)

夏目漱石
名は金之助
小説家
大正五年
歿、
年五十

三 みやげ

ねむれる稚兒の

枕邊に

母のみやげは

置かれたり

笑がほも

母のたのしさも

赤きふくさに

包まれて

覺めもいでなば

いかばかり

はしきひとみの

かゞやかむ

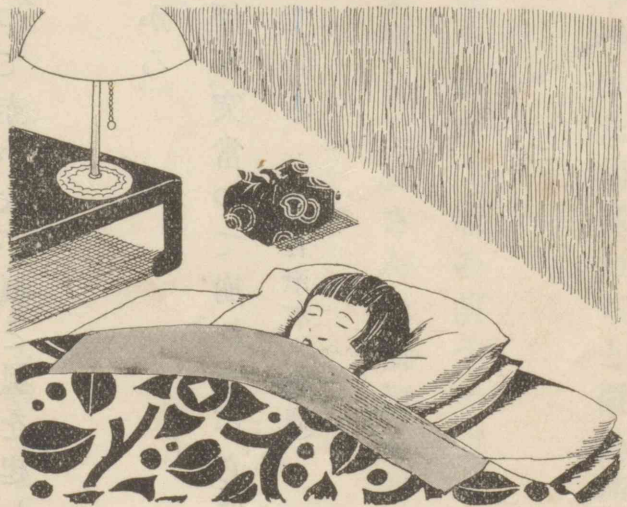
ねむれる稚兒の

枕邊の

灯かげに春の

夜はふけぬ

(西條八十―赤き獵衣)



西條八十
詩人
早稻田大學講
師

シシリ島
地中海の最
大島でイタリ
ヤに屬し、メ
ツシナ海峡を
以てイタリヤ
と相對す

四 シシリ島の春

雨がしのびやかに降出した。凍つたものはみな解けてゆく。私の傘のしづくまでが、春をつたへて大地にしみ込んでゆく。ぼんやりと人を待つ間の心のやり場を、春の聯想や思出が、私をとちこめてしまつた遠い日に求め

させた。

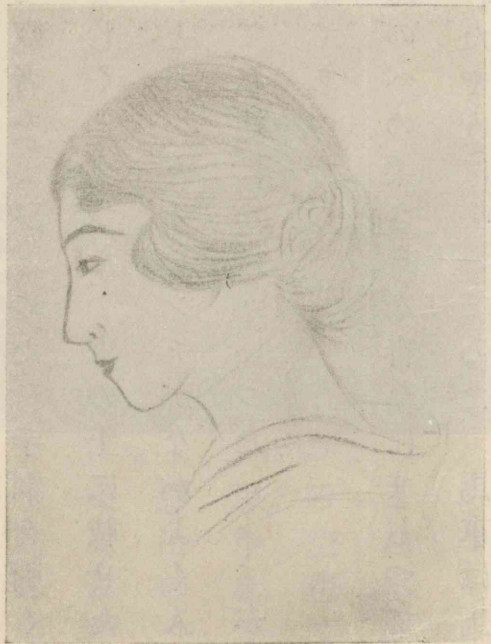
レモンの林には、黄金の鈴が幾千と實つてゐた。しらぬ小鳥の聲ばかりが聞えて来る。赤い毛絲と鳥の羽根で首飾をした馬が、私達の馬車を向ふに見えるお城の下までひいてゆく。鳶色のつや／＼しい頸を馬がふるたびに、しやらん、しやらんと首飾の鈴がやさしく鳴るのであつた。柔な、しかも熟れた南國の春のかゝやきは、空から蜜を降らしてゐるやうな午後であつた。

「お伽噺の行列が、あのお城から來さうに思ひますね。」

「ほんとに夢の國にでも來たやうで御座います。お、お日さまのあたゝかなこと。三月の、けふは幾日なの

でせう。日も忘れてしまつて――」

「お國ぢや彼岸櫻が咲いて、お詣りの人で京は賑やかな



ことでせう。随分私達は遠いところ作者に來ましたね。二度とはもう來られ畫ないでせう。よく覺えて置ませうよ。レモンのいゝ

匂が、まとうてくるぢやないの――」。
「ほんとに忘れられないよい旅ね。」

姉と妹とは、あかぬ旅路の一日に、心ゆくまで浸されてゐた。大きな沓ツツをはいて、まあるい腰をした女が、籠を下げて馭者をよびとめた。手綱を引くよりも先に、馬はおとなしくとまつた。車の上に載せた籠の中には、ソーセイジとパンとオレンジが、なかよく入つてゐる。女は笑顔して、私達になにかいつた。――が私にはわからない言葉であつた。

道のべの柔さうな青草にまじつて、紫と黄ろい花がこぼれたやうに咲いてゐた。馬車は馬の蹄の音を、かつかつと同じ調子にたてて、お城の道に上つてゆく。片側には杓子のお化けのやうなシャポテンがぬく／＼と立つて

ゐた。二人は物語の國にたづねて來たやうな、うつとりとした心持に酔うてゐたのであつた。



春の――リシシ

これは夢でも幻でも、まして私の空想でもない。春がくれば思ひ起す、そして今は胸に痛い思出の一つである。「二度とは來られないのね」といつた聲はまだ耳に留まつてゐるのに、姉はもうこの世を去つて十年餘りになる。この旅の話もまだ話しきれないその翌年逝

九條武子

九條良致男夫

歌人

昭和三年没

年四十二

ヴェニス
の港でヴェニ
ス州の首都

ポー河
イタリア北部
の山中からアル
プ山脈の東流し
ドリアチツク
海に入る

つてしまつた。地中海の美しい輝きに包まれて、今もレ
モンの實は、黄金の鈴のやうに實つてゐるであらう。
それは、南ヨーロッパはシシリー島の首都パレルモの春
であつた。

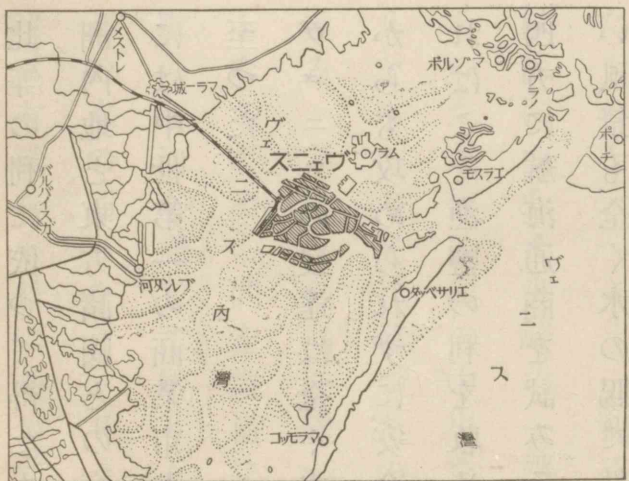
(九條武子—無憂華)

五 水の都

ヴェニスはイタリアの有名な都市であつて、風景の美を
以て世界に喧傳された水の都である。

この都は北イタリアの沿岸で、ポーの河口に近い地點に
ある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く
離れて居り、又海に向つては、長く斗出した洲崎に依つて

限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、



の地であつたばかりでなく、少からぬ漁鹽の利を藏して

居た。ヴェニス^のの住民がおひくゝ發達したその資源は、此等の利に依つて得たものである。そのみでなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つて居たので、遂には中世第一の商業市と云はれる位な盛況を呈するに至つた。

ヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに、安全な生活を營むことが出来、水あればこそ漁鹽の利を收める事が出来、水あればこそ更に四方に航海通商を試みる事が出来たのだ。その美しい風景も、全く水の賜に外ならぬ。此の如くしてヴェニス^はは全く水から生れたやうなものだ。ヴェナスの女神

ヴェナスの女神
ローマ神話中
にある女神
に泡より
生れたと稱せ
らる

は水に浮ぶ泡から生れたが、ヴェニスの都も亦それに似たものと云へよう。初め都は海に面した洲崎の一端にあつたが、後に潟の中央なるリヤルトの島に移つたのである。今はこの島全體が都となつて、その間を縦横に無数の運河が通じて居り、人はこの水の通りを、ゴンドラと呼ぶ古風な小船に乗つて往來する。多くの人家は直に水に臨んで居るから、戸口の

ラ ド シ ゴ



石段は水に洗はれ、ゴンドラは直にこの戸口に着けるこ



大水路とサンマルコ寺院

とが出来。他の都市では
けた、ましい自動車の警笛
や、鋪石を軋る轍の音で喧し
いの、ヴェニスでは水を分
けゆく静な權の音が聞かれ
るばかりだ。文明の進歩し
た今日、此の如き都市は實に
世界に稀なものといつて宜
しい。

あゝ、水に浮ぶヴェニスの都、寺院に宮殿に、昔の榮華を語

る大厦、高樓が、色さまの大理石に時代の古びを見せ
て、一灣の水、晝の静けさに眠る上に、蜃氣樓かと見紛ふば
かり浮び出る時、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の滑
かなる水面をたゆたふ時、或は又遠く銀髮の靡けるが如
く瀉の彼方を限る洲崎の間を分けて漁船の歸り來る時、
若しくは月靜なる夜、ゴンドラの船歌面白く、水に映る町
の燈火を權の先にかき亂して行く時、水に浮ぶヴェニス
の都の美しさは、如何に遊子の心を動かすであらう。朝
の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬ヴェニスの美は即ち水の
美に外ならぬ。
併しヴェニスに負ふ所は、たゞにその美觀のみでは

アドリア海
イタリヤの東
ダルマチヤの
西に在る海灣
小アジア
アジャトルコ
の一部
シリヤ
アジャトルコ
の州
エジプト
アフリカ東北
部の一國

ない。ヴェニスには實に水のために立派な海港となるこ
とが出来たのだ。即ちその住民は水を利用して、アドリ
ア海から遠く東に航し、小アジア・シリヤ・エジプトの沿岸
に通商貿易を試みた。従つてアドリア海は、ヴェニスの
爲には貴重なものであつて、これがなければ、あのやうな
發達は到底望まれなかつたのである。さればこそ昔の
ヴェニス人は、アドリア海をヴェニス市の夫と見立てた
のである。都を妻とし海を夫とする、何と美しい想像で
はないか。

町とアドリア海との結婚式である。この式は市民が行
ふ儀式の中、最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づつ行はれ
た。この日、ヴェニスの長官は、自ら花を飾つた政府の大
船に坐乗し、後には無数の貴族の船を従へ、美々しい行列
をつくつて、悠々と海上に漕出し、こゝでヴェニスの都を
代表して、黄金の指環を海に投じ、かくてアドリア海と千
年のちぎりを籠めたのであつた。夫アドリアと妻ヴェ
ニス、一は人間の作つたもの、一は自然そのもの。その自
然なる夫は朝夕潮の満干に洲崎の岸を洗ひ、リヤルトの
島を訪れて、千萬年も變らないけれど、人爲の妻は衰へて、
今は到底昔の誇も榮華も認められない。(天類 伸)

大類 伸
文學博士
史學者
東北帝國大學
教授

武衡 武衡 羽姓は清原、出 家衡 清原武衡の甥

勿來の關 常陸・磐城の 國境にある

六 勿來の關

武衡すでに縛に就き、家衡誅に伏し、其の黨四十八人また
斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國內靜平に
して、民心悅服す。すなはち留守を置きて、京都に還らん
とす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々また
戰時の秋に似ず。行きくへて勿來の關に差掛る。山上
模糊として白きは雲か、地上繽紛として翻るは雪か。雲
と見えしは梢の花、雪と思ひしは散來る櫻、關山春深きと
ころ、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥傯の間に

在りては、月を見ても樂しからず、鳥を聞けども嬉しから
じ。今や干戈戦争のしるし既に戢おさまりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹
下に駐めて顧望すれば、胄も花、鎧も花、身はいつしか畫中絵の中
の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。

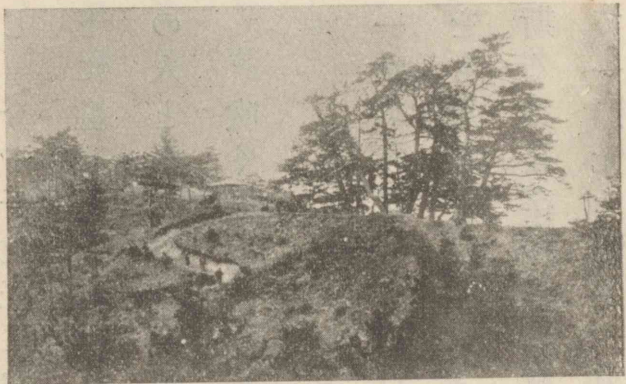
吹く風をなこそその關と思へども

道もせに散る山ざくらかな

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとする
をも知らず。

斯くて長亭・短驛、日數を累ねて京に着す。百戰功を積み
て、一門光を添ふ。來りて賀うらやまを述ぶるもの、門前市を成す。
武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて

一貴人 關白藤原賴通 道長の子



勿來の關址全景

語る、陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在り
つれば、皆それ〴〵に見候ひなん。
これのみこそ羨ましき心地すれ。
と。義家畏りつゝ、答ふ、心長閑け
く候はんには、床しきことも候べ
けれど、軍に暇なき身には、優しき
詠とても候はず。唯勿來の關と
申す所にて、花の散るさまの餘り
に興深く、あはれ、心あらん人に見
せまほしく覺え候ひしが、其の儘
にうち過ぎなんも口惜しく、拙ツツき口吟に任せて、斯くなん

熊田葦城
名は宗次郎
著述家

仕りぬ。とて、彼の吹くかぜの歌を打誦んずれば、實にも秀
歌をこそ致しつれ。とて、感歎特に淺からず。
花は櫻木、人は武士、斯の人斯の花を詠じて、花と人と千古
に香し。

(熊田葦城 日本史蹟)

七 花の備忘録

手許の備忘録を開いてみると、四季折々の花のことが控
へてある。

櫻の花

種類 彼岸、染井吉野、大島、山櫻、八重、……。
櫻の保存會といふものもある。

松雪草

風鈴のやうな白い花の咲く草。

英名スノー、ドロップ。

秋九月にうゑて二三月に咲く。

草立、五六寸、花壇に密植する。

四五年その儘におく。半陰の地がよい……。

こんな風に、順序も次第もなく、書きつらねてある。これらの言葉は、大抵、時々の新聞やら、雑書やらの、極めて文學的ならぬ種類のものから書取つたものであるけれど、その片言隻語は、果てしない詩情を私の心から喚出すのである。とりとめなくそれを讀んで行くうちに、忽ち心は

花の野山に飛んで、香はしい若草を藉いて身のまはりの花の馥郁たる香を嗅ぐやうな思ひがしてくる。

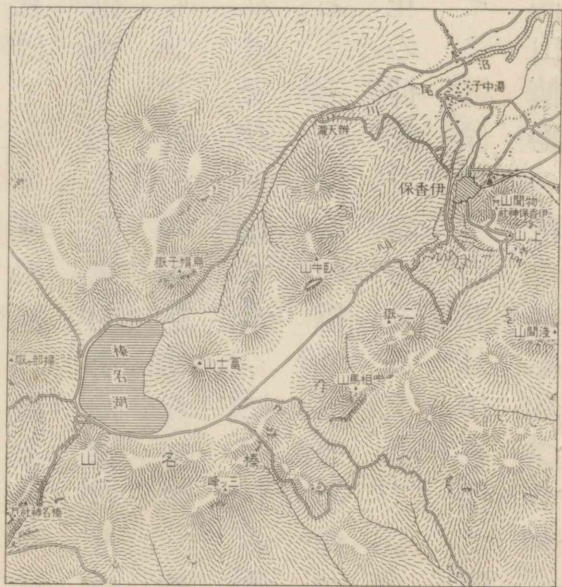
私はこれを花の備忘録と名づけてゐる。けれども、それはかうした散文的な抜書のためではない。その中にはもつと楽しい、生きたメモランダムが取つてあるからだ。私はそれを見て、すぐに懐しい會遊の日の喜びを蘇らせる。それは旅の折々に、その行つたところで摘みとつた花の押花なのである。

そこには、去年の五月伊香保で摘んだ花もある。稀には高山植物の花などもあつて、すべてで二十種位もあらう。今開いてみると、みづくしい緑色であつたその葉や、ふ

メモランダム
覚え書き

伊香保
群馬縣の有名
な温泉場で、
榛名山の中腹
にある

榛名の山
上野の西部に
ある休火山



つくりとしてゐたその莖が褐色に變つて、花の白かつたものや、紫であつたものまでが、おなじやうに鶯色がかつてゐる。たゞ岩つゝじの花の黄色いのが、その摘んだときのやうに、やつぱり明るい黄色の花弁を五つ平かに開いて、花蕊の愛らし

い尖を美しくもたげてゐる。

この岩つゝじは、榛名の山のそこゝに、また嶮しい二つ

二つ嶽
榛名山麓の一
峯

嶽のはるかな斷崖に、あだかも湧出してゐる清水のやうな清らかな色をつらねてゐたのであつた。この色の褪せぬ岩つゝじの花をぢつと見てゐるだけで、私はあの時の全山の翠色（翠色）を眼底に思ひ浮べることができ

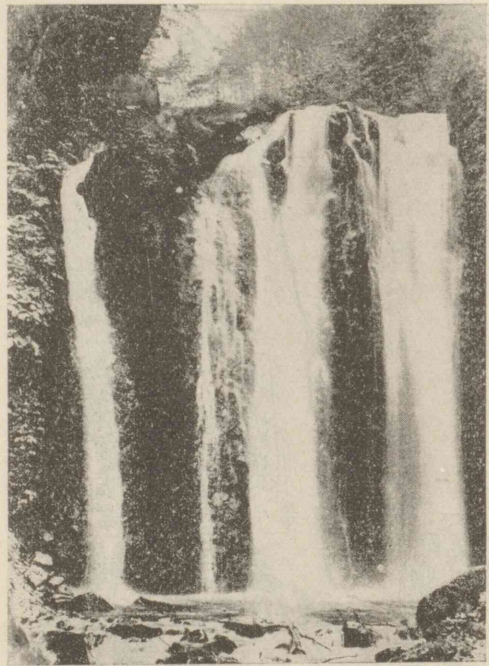
根のついたまゝに押ししてある麝香堇——これは葉形のぎざぎざになつてゐるのが、ちやうど楓のやうで、普通の堇に比して、その芳香が深い。堇といへば、たゞ野堇か、ヴァイオレット・三色堇位しか知らなかつた私には、この麝香堇はめづらしいものであつた。けれど、このほかの草葉草花は、おほむねごくありふれたものである。あの山には、「どうぞ草木を折らないで下さい」といふ制札

が到るところに立つてゐたし、それでなくとも、私は無雑作に山の美を摘みとるやうな事を好まなかつたので、榛名の山のゆき返りにも、花を採集しようなどといふ氣は起さなかつた。だからいろ／＼の珍しい花を、その儘見過してゐたが、その後ふと考へついで、伊香保よりも麓の方、水澤や、湯中子の方へ行く路のあたりでいろ／＼の花を摘んだ。

岩つゝじの花よりも、一層美麗な原色をとめてゐる山吹の花は、榛名の湖水から流れ落ちる沼尾川の下流にある辨天の瀧へ行く路に、一杯に咲きつゞいてゐたのである。それが白い木苺の花と點綴し合つてゐたのが、實に

いゝ眺であつた事を思ひ出す。

水澤路で摘んだ蒲公英の花は、やはり、黄いろいはずであ



るが、もと／＼毛のやうな花瓣であるためか、引立たない天でざら／＼してゐる。

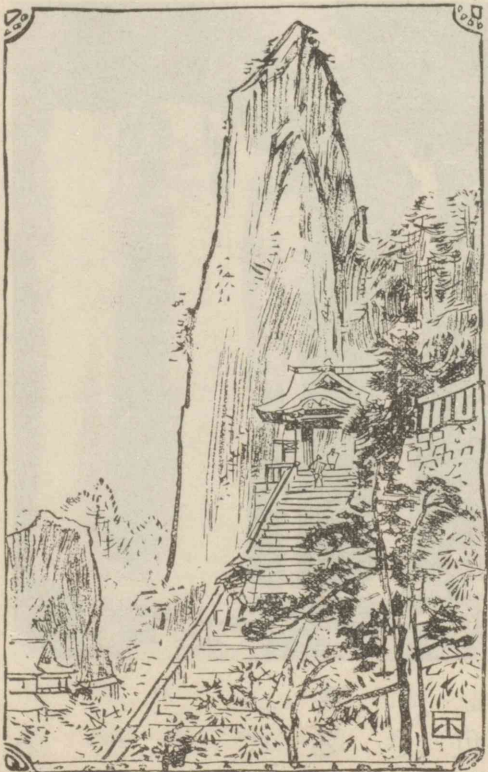
さまざまの草花の色のうち、かうして

押花にしてみると、黄色がいちばん褪せないで、紅や紫などは褪せやすい。それが寂しくもあり、又何かしら考へ

榛名神社
榛名山上にあ
る

させもする。

その旅の時、榛名神社の社頭は、紛々たる落花であつた。



榛名神社

山櫻はとうに散つてゐたから、その日の花は、吉野とか何とかいふのもあつたらう。それが室田の方からのぼる取つ附きの橋のところから、鳥居のところまで眞白に飾つたやうに落ち散つてゐた。そしてさつ

しづ心なく
云々
久方の光のど
けき春の日に
しづ心なく花
の散るらん
(古今集、紀友
則)

生田春月
名に清平
詩人
評論家

瀬戸内
瀬戸内海のこ
と

と吹いて来る山風に、あちらによれ、こちらによれする、ぢつとその風情を見てみると、古風な日本の情感が心に漲り渡つて、「しづ心なく花の散るらん」と歌つた古人の感懐が、身につまされて思ひやられた。その時の花片が五六點こゝにある。併し私は、その花片をこゝに押花にしたのが寂しい。それは既に聲のつぶれた歌妓の姿であつた。花ではなくて、花の残骸であつた。心なきわざよと私はひそかに嘆息した。

(生田春月―草上静思)

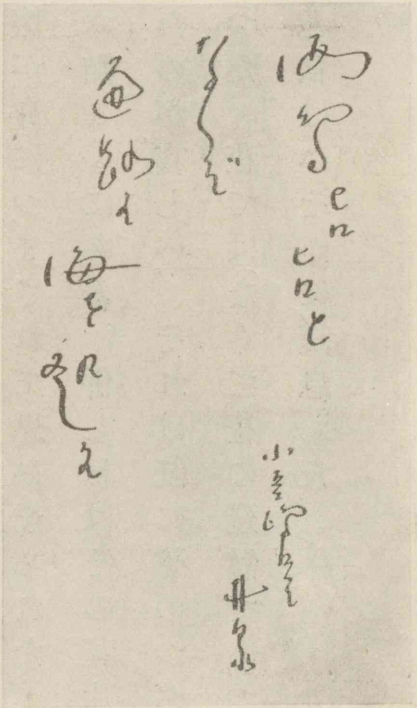
八 四國遍路

瀬戸内の自然は、豪快とか、或は悲壯とかいふ感じには乏

筆蹟
小豆島にて
海鳥ヒロヒロ
となくぞ
遍路は海を越
え

弘法大師
僧空海、眞言
宗の高祖、承
和二年入寂、
年六十二
小豆島
讃岐の北岸に
近いであり

しいけれども、宏大な、又、雄渾な感じはある。單に典雅華麗な女性的の美しさだけではない。寡黙にして沈着な



井泉水筆蹟

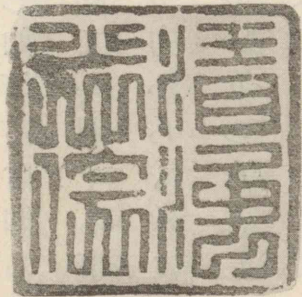
風を思はせる男性的の強さがある。殊に其の親みやすく、おつとりとした明るさこそ、私が内海の

自然を好む所以だ。私のこの感じから見れば、瀬戸内海の自然にふさはしい人格としては、弘法大師の外にはな

く潤されて居る。神秘的な教義の鍵を握りながら、民衆の耳に入り易く説いて歩かれた大師と、その使徒が振る錫



志度寺印



杖の輪の、ちりん〜といふ音が、その昔、否、その昔から今まで、麥畑に光を降らす雲雀の聲のやうに、永劫變らず人々の心に大悲の光を降らして居るのであつた。りん〜といふ牙えた音が、遙の山裾からこの山莊にまで聞える。

それは「お遍路さん」が振る鈴の音なのだ。――「お遍路さん」とは、何といふ親みぶかい言葉であらう。――四國八十八

この山莊
作者は當時小
豆島の知人の
山莊に滞在し
てゐた

志度寺印
清浄光院、大
郡は讃岐國大
志度町にあ

箇所に残された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのが「お遍路さん」である。しかし如何に信仰の爲とはいへ、四國を一週する事は、日數からも勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として大抵の事ではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八ヶ所の靈場を一順すれば、同じ功德を積み得る事とされて居る。「島四國」といふ言葉も出來て居る。島四國の遍路にして



土庄港
小豆島の一港

も、女の脚では六七日かゝるといふことである。お遍路さんの多くは、岡山或は高松から來る。船で土庄港トシヤに着いて、そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路を辿るのである。菅笠を被り裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名札を入れた札箱を吊るして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持ち、淋しいのは一人、二人、多いのは何十人といふ團體が、銀のやうな海的光を浴びながら、海近い麥畑の中の道を辿つて行く。それは繪である。美しい繪である。この山莊にまでも聞えるりん／＼といふ牙えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も暖く日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的ひまな四月頃に一番多く見受けるといふ事だ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。一體遍路といふものが、いつの時代から始まつたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信念を厚くする上からいつても、佳い事だと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る處で愛せられる。また恵まれる。お遍路さん同志も、又、お互に遍路であるといふ事の爲に信賴する、扶助する。これが實にいゝ事だと思ふ。未知の人たちが道連になつて親んで行く、路を教

へ合ひ、足らぬものを足し合つて行く。お遍路さんが、路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參するには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも娘でも、男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致する事が出来るのだ。「南無大師遍照金剛」と讚する聲が出て來るのだ。これは實に美しいことだ。争鬭と欺瞞とに満ちたこの世の中にあつて、信賴と扶助とに心を合せて行き得ることほど美しい事が他に

あるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない、彼等が愛し合ひ信じ合ふことに生きるが故に美しいのである。

さうして、このことは、獨り彼等お遍路さんの上のことのみではない。私たちは皆人生のお遍路さんである。めいめいに自ら負はねばならない物を負うて、自分の名を書いた札を撒き散らしながら、自分々々の路を遍歴してゐるのである。——私は思ふ、私たちはこのお遍路さん

に學ばねばならない、遍路といふ行事を残した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。さうして人間の悉くが、お遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私

ちは先づお遍路さんの信と愛とを以て、人生を歩きたいものである。
(萩原井泉水―山水巡禮)

萩原井泉水
名は藤吉
俳人

淨瑠璃寺
山城國相樂郡
當尾村にある

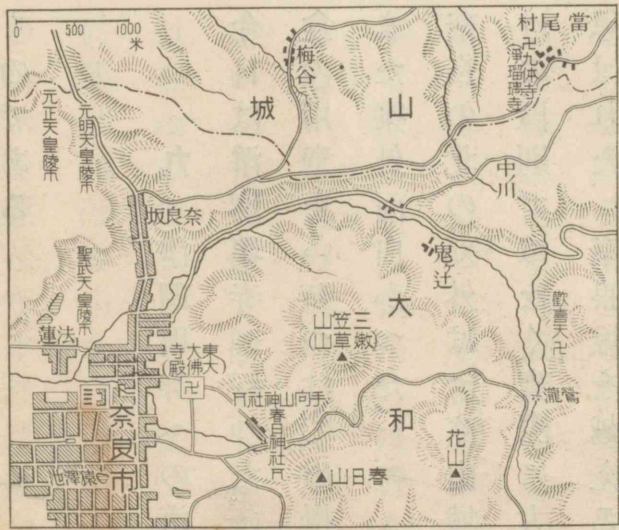
奈良坂
奈良市の北、
木津街道にあ

九 淨瑠璃寺への道

今日は淨瑠璃寺へ行つた。晝すぎに歸れるつもりで、晝食の用意をいひつけて出掛けたのだが、案外手間取つた。また案外面白かつた。

奈良の北の郊外は、すぐ山城の國になる。それは名義だけの區別ではなく、實際に大和とは違つた氣分のやうに思はれた。奈良坂を越えると、もう光景が一變する。道は小山の中腹を通るのだが、その山は薄赤い砂の、極めて

三笠山
奈良市の東に
ある



瘦せた感じを持つたもので、幹の色の美しい、ひよろ／＼した赤松のほかには、殆ど木らしいものはない。それも道より下の麓の方に所々群つてゐるきりで、あとは三尺に足りない雑木と小松が、山の肌を覆ひ切れない程度に、斑に山にしがみついてゐる。さうしてその間々には、一面につゞじの花が咲亂れてゐる。この景色は、三笠山や、その南の方の大和の山々には

見られない。しかし、その乾いた砂山めいた禿山の氣分は、僕には親しいものだつた。かういふ所では、子供でも山傳ひに遊びまはれる。ちやうど今頃は柏餅に使ふ柏の若葉を、それが足りない時には、焼餅薔薇のすべ／＼した圓い葉を集めて歩く時分だ。つゞじの桃色や薄紫も、賑やかなお祭らしい心地に子供の心を浮立たせる。谷川へ下りて水いたづらをして、もう寒くはない。じいじいと蟬の聲が何となく心細さを誘ふまで、子供たちは山に融入つたやうになつて遊ぶ――それは二十年前の僕の樂だつた。僕は故郷に歸つたやうな心持で、飽きずに車の上からこの景色を眺めてゐた。

この途の感じが、淨瑠璃寺へ行つてからも僕の心に妙に働いた。といつても、淨瑠璃寺へすぐついたわけではない。道はまだ大變だつた。山を出て里に出たり、それもいつか通りすぎてまた山の間に入つたり、やがてまた舊家らしい家のある綺麗な村へ出たり——しかも雨上りのひどいでこぼこ道で、車に乗つてゐるのも閉口であつた。とう／＼我慢がしきれなくなつて、その狭い田舎道に下立つた。さうして若々しい櫟林の中を、穗の出かけた麥畑の間を、汗をふき／＼歩いて行つた。寺の麓まで來ると、小石のごろ／＼した危なかしい急な坂を——それともどうかすると百姓家の勝手口へ迷ひこんで行きさ

うな怪しい小道だつたが——歩かねばならなかつた。本道の方は崖がくづれて、とても通れなさうに見えてゐた。もつとも思の外にその急な坂は短くて、すぐ峰づたひの坦々たる道へ出た。赤松の林の間には、相變らずつつじが咲いてゐる。道傍に石地藏の並んだ所もある。大きい竹藪の間に、人家の見える所にも出た。水の音が頻に聞えて、いかにも幽邃な趣がある。あれこそ寺だらうと思つてゐると、それは水車小屋だつた。山の下から眺めた時、遙か絶頂の近くに見上げた屋根がこれだつたらしい。もうそんなに高く登つたのかと思ふ。と同時に、一體どこまで登ればいゝのだらうと思ふ。やがて馬

鹿に大きな岩が道傍の崖からはみ出してゐるだらう



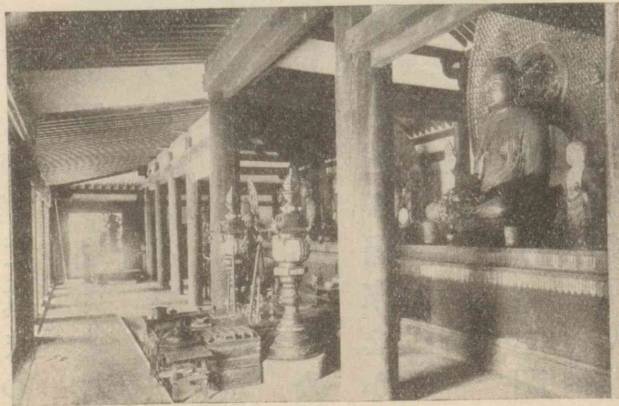
浄瑠璃寺

上りを行くと、急に前が開けて、水田にもなるらしい麥畑のある平地に出た。村がある、森がある、小山がある。こんな山の上にあるだらうとは豫期しない、いかにも長閑な農村だつた。浄瑠璃寺はこの村の一隅に、この村の寺らしく納まつてゐた。これも豫想外であつた。しかし何ともいへぬ平和ないゝ氣持であつた。——こんな風で、もう奈良坂

まで歸つてゐていゝ時刻に、やうやく浄瑠璃寺についたのである。

さて、この山村の麥畑の間に立つて、寺の小さい門や白い壁や、その上からのぞいてゐる松の木などの野趣にみちた風情を眺めた時に、僕はそれを前にも見たといふ氣がしてならなかつた。門を入つて最初に目についたのは、本堂と塔との間にある、寂しい池の水の色と葦の若芽の色とであつたが、その奇妙に澄んだ濃

浄瑠璃寺(九體佛)



い、冷たい色の調子も、初めてだといふ氣がしなかつた。背後に山を負うて、いかにもしつくりとこの庭にはまつてゐる優美な形の本堂さへも、また庭の隅の小高いところに、朽ちかゝつたやうな色をして立つてゐる小さい三重の塔さへも、僕には初めてではなかつた。そんな事がある筈はない。しかし堂の前の白い砂の上をあるきながら、僕はこの漠然たる心持から脱することが出来なかつた。

もし前世の記憶といふものが——いや、今はさういふ問題には觸れまい——たゞ、かういふ事を考へて欲しい。浅い山ではあるが、とにかく山の上に、下界と切離された

やうになつて、一つの長閑な村がある。そこに自然と抱合つて優しい小さな塔とお堂とがある。心を潤すやう



浄瑠璃寺三重塔

な透きとほつた可愛らしさが、すべての物の上一面に漂つてゐる。それは近代人の心には、餘りに淡きに過ぎ、平

凡に過ぎる光景だが、しかも我々の心が和らぎと休息とを求めてゐる時には、祕めやかな魅力で我々の心の底の

桃源の傳説の
支那の仙郷

あるものを動かすのである。桃源の夢想——それが淨土の幻想と結びついて、この山上の地を擇ばせ、この池のほとりのお堂を建てさせたのかも知れないと思はれるが、その我々と全く縁の無い昔の人の夢想に、我々がなほ共鳴するあるものを持つてゐる——それは僕には驚きであつた。さうしてその心持を省みて檢した時に、僕はかつて自分が桃源に住んでゐたのだといふ事を發見した。日頃氣附かないこの事を、今日の旅で氣附いたのが僕には面白かつた。

(和辻哲郎—古寺巡禮)

和辻哲郎
思想家
京都帝國大學
助教授

一〇 一萬米

三周——四周——

その頃から選手の間隔が著しく違つて來た。

東西對抗の陸上競技も今年は第五回目で、その決勝に出場すべき選手たちの意氣は、關西も關東も猛烈であつたから、新しい記録が期待されてゐた。

この一萬米も、今年からトラックで行はれることになつたから、觀衆は一目に選手の力量、技巧並に作戦を大觀することが出来るので、四百米のハードルや、千六百米のリリースなどと共に、トラックの新しい興味になつてゐたのである。何しろ一萬米といへば、里程にして約二里半、四百米のトラックを二十五回廻らなければならぬ。一

東西對抗の
陸上競技
東京朝日新聞
社主催の競技
會で、明治神
宮外苑に行は
れた

人でゆつくり驅けるのさへ、いや歩くのさへ一通りではないのに、これは一着二着を争つて多數と競争するのである。

選手連の日頃の練習も思はれて、スタートと共に、晩春の風冷めたき神宮外苑のスタンドはどよめいた。長距離なので、百米や二百米などのやうに、スタートの息づまるほどの緊張さはないが、數も多く、姿も思ひ／＼色さまざまの賑はしきで、選手は各自その練習の程度と姿勢とを守りつゝ疾走する。そのなかに一人、へうきんな赤帽を冠つて、顎にちよびひげを生やした選手がゐた。

地方青年團の一人であつた。スタートの時から、逸早くその風體が觀衆の眼をひいて、競技場の空氣に一種の愛嬌を作つた。が、彼は十周目から、いつの間にか先頭の選手と一周近く遅れてしまつた。

審判員の一人は、選手が審判臺の邊へ來る毎に回數をしるした紙をめくつて、あと何回と呼びかける。これが選手を一層元氣づける。

あゝ、一周々と減つてゆくその回數の痛快さよ。しかし一周遅れた選手に對しては、なほその一回だけを多く呼びかけられることは言ふまでもない。その度に赤帽の選手は、にこ／＼と審判員に微笑を投げつけて通過す

る。そしてまつしくらに走路を辿る。最初スタートの線上にあふれるほどであつた選手も、一人、また二人、青空に吸はれたか、大地に沈んだか、その影を消してゆく。さういふ落伍者のある中に、遅れても最後までと、彼はねばり強く兩脚の筋肉に青春の意氣をみなぎらせつゝ、額の汗をぬぐひもせず、しかも悠々と急がずあせらず、一周々とトラックの土を踏みかためる。彼は一周遅れたので、先頭のすぐあとを追つて行く。一周の差さへなければ、さながら先頭を争つてゐるやうに見える。

「赤帽しつかり。」

「ひげさん頼むよ。」

豫選なので、競技といつてもこんな聲援に何處かくつろいだ空氣が漂ふ。やがてピストル一發、すでに第一着第二着は決定したが、なほ一周餘を残した彼は依然として悠々とトラックを驅けて、自分だけの最後の突進もあざやかに決勝點を踏んだのであつた。しかしそれは、もう「決勝點」ではなかつたのだが――。

その勝敗を眼中におかないで、走るだけは走るといふ態度の痛快さに、スタンドの觀衆は思はず一齊に、第一着の勝利者に送つたと同様な拍手を彼に送つた。彼ははじめて赤帽をぬいで、それを右手に振りながら、こゝと

土岐善麿
歌人
東京朝日新聞
記者

小田原
大久保氏十一
萬三千石の舊
城地

栢山村
神奈川縣足柄
上郡、今の櫻
井村
二宮金次郎
即ち尊徳翁
安政三年歿、
年七十

退場した。一萬米、その競技にこの選手が勝利者でなかつたことは明かである。しかし「人間」としての生活態度に於て、決して彼は「敗北者」ではない。彼は最後まで自分の力を信じ、他をかへりみることなく、明快な心境をもつて走つてゐたのである。

(土岐善麿―春歸る)

一一 二宮尊徳と妻

相模の國小田原藩に、服部十郎兵衛と呼べる一人の家老ありけり。其の家奢侈に耽りし結果、千兩と云ふ當時に在りては多大の負債を生じて、其の職をも勤め難きに至りぬ。依りて親族會議を開き、家老の役を辭するか、若しくは一家の仕法をつくるかを協議せしが、遂に仕法をつくる事に一決せり。

さて其の仕法をつくるには、栢山村の二宮金次郎こそ適任なれ。彼は將に斷絶せんとしたるおのが家を再興せるのみならず、村の爲にも盡瘁し、其の功勞尠からざる經濟家なればとて、二宮先生に其の仕法を依頼する事となれり。かくて依頼の使者、先生の許に至りしに、先生は、「己は農夫なれば、到底さる依頼に應ずべき者にあらず。とて、固く辭退しけれども、容易に聽入れず、益懇請しければ、先生は已むを得ず二三の條件を提出し、其の中には、何にてもあれ服部家は先生の言に違背せざる旨の條項もあり

Yes

筆蹟

報德訓

父母根元在天地命令、身體根元在父母生育、子孫相續在夫婦丹精、父母富貴在祖先勤功、吾身富貴在父母積善、子孫富貴在自已勤勞、身命長養在衣食住三、田畑山林、田畑山林、人民勤耕、今年衣食在、去年產業、來年衣食在、今年艱難、今年歲不、可乾山佐久間政

しが、快く承引せられしかば、茲に愈、仕法をつくる事となれり。これ實に先生が二十五六歳の時なりき。爾來先生は服部家に住み、一定の方針を立てて、種々の勞役に従事せり。家扶若黨の務は言ふも更なり、時には下女下男の

報德訓
父母根元在天地命令
身體根元在父母生育
子孫相續在夫婦丹精
父母富貴在祖先勤功
吾身富貴在父母積善
子孫富貴在自已勤勞
身命長養在衣食住三
田畑山林在人民勤耕
今年衣食在、去年產業
來年衣食在、今年艱難
今年歲不、可忘報德



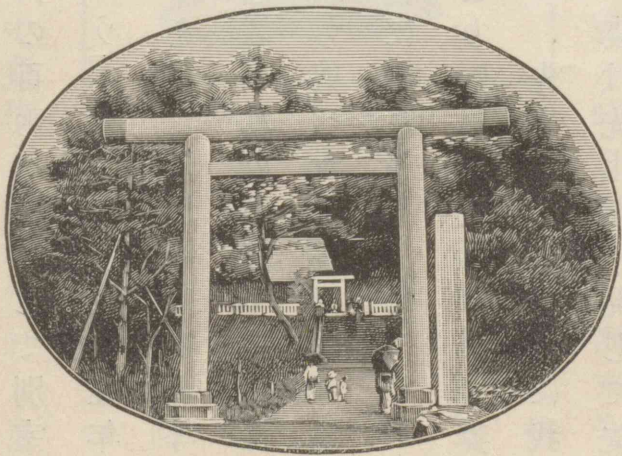
訓德報び及像肖德尊

仕事すら爲し、五年の後、遂に千兩の負債を悉く償却し、なほ三百兩の剩餘金を得たり。依りて服部家にては、二百

兩を自家の豫備費に充て、殘額百兩は報酬として、二宮先生に贈與したり。さて先生は、其の百兩を懷にして別室に入り、下女下男を集めて言ふやう、不才の身を以て五年間に當家千兩の負債を償還するを得たるは、一に御身等が余の意を體して勤務せしに因る。其の勞謝するに餘りあり。とて、懷中の百兩を全部頒ち與へたる後、己は一錢をも身に帶びずして、飄然栢山村に歸れり。先生の歸村すべき由は、數日前より知れ居たりければ、妻は風呂など沸かして待ち居たり。先生は久しぶりに我が家に歸りて、うちくつろぎぬ。妻は先生を一見して、先づ其の服装の龜末なるに驚きけるが、懷には巨額の金子

あるべしと想像して、獨り自ら心を慰めおたり。然るに、待てども待てども先生は金子を出すべくも見えざりしより、妻は遂に堪へかねて、服部家より幾許の謝禮金を受け給ひしか。と問ふ。先生告ぐるに實を以てし、百金を悉く下女下男に與へし旨を答ふ。妻は且落膽し且憤怒して、君の如き人に連添ひゐても、たゞ末のみ案ぜらるれば、今宵限り離縁し給はれ。と乞ふ。先生は大いに當

二宮神社
小田原町にあ
る



二宮神社

櫻町
栃木縣都賀郡
物井村の字、
此の地は小田
原侯の分知で
宇津氏の采領
であつた。

惑し、御身も五年間家を守りおたるに、今離縁を取りては、衣類とても無からん。強ひても歸らんとならば、暫く辛抱して、機にても織り、小遣錢をも貯へて後歸りては如何。と宥めければ、妻も其の言に従ひ、暫時先生の家に止りしが、後遂に里方へ歸り行きけり。先生が野州櫻町に赴任する時、伴なひ行きしは後の妻なり、名を歌子と云ふ。歌子は武家に奉公したりし女にて、氣象も強かりければ、先生より野州に赴くには、堅忍不拔の覺悟を要す。と言渡さるゝや、女は三界に家なしと承る、君と共にならば、たとひ水火の中なりとも厭ひ申さず。と答へたりとぞ。

飯泉村
神奈川縣足柄
下郡今の豊
川村の地

さて先生は、櫻町に於て漸次出世したる後、（かんきかしく）報徳仕法の爲に小田原近在を巡回せしが、其の時、以前の妻は甚しく零落し、先生の巡回先なる飯泉村（イヅツ）に來り、人を介して先生に面會を求めたり。先生は即座にこれを拒絶せしが、前妻の意蓋し金錢の無心にあるを聞き、一旦離縁したる者に、金子は遣はし難し。但し明朝出立の際、村はづれに金を紙に包みて遺棄すべければ、これを拾はしむべし」と答へたり。

依りて前の妻は、翌朝未明より、村はづれなる松の木蔭に立隠れて待ちゐたりしに、頓てそこに差掛りし先生は、果して紙包を落したり。馳寄りて之を拾ひ見るに、中に五

留岡幸助
北海道に感化
農園を經營
し、兼ねて家
庭學校の校長
である

六兩ばかりの金子ありければ、涙をながして喜びたりと云ふ。
（留岡幸助著報徳一夕話に據る）

一二 旅と歌と

旅行の樂は、想像しただけでも人の心を惹きつけてしまふ。殊に、ます／＼複雑繁多になつて行く大都會の生活に浸つてゐる人々にとつては、旅行はこの上ない慰めである。心を本當に落ちつかせることのない實生活から逃れ出て、自然の中へ入込めば、それだけでもう人の心は、新鮮な刺戟に蘇つてくるのを感じるであらう。この潑漑とした蘇生を味はふだけでも、旅は十分喜ばれる價値

をもつてゐる。ましてそこには、未知のものを始めて探る喜びや、自分だけの氣持を樂々と味はふことの出来る心安さも加はつてゐる。その上、史蹟や名所、珍奇な風俗や言語等が、遠く家を離れて旅に出たといふ感じを深くするから、人の心は自ら曇りなく淨められて、すなほな氣持で、目に觸れ耳に聞くところのものをいとほしむのである。

それにつけても、昔の旅を今でも想像させる「草枕」といふ言葉が、すぐに心に浮んで来る。今こそ交通機關と旅宿とが發達したけれども、徒歩か馬の背でしか旅することの出来なかつた昔の旅行では、かれいひを準備したり、或

萬葉集の時

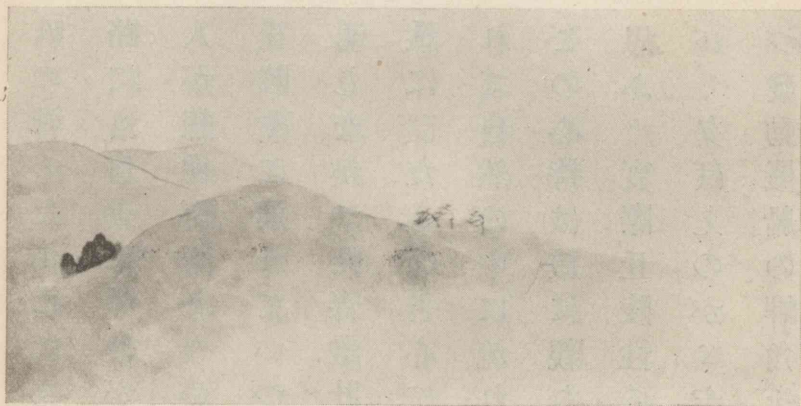
代 萬葉集の時
歌集が國最古の
集められた歌
遷都前後の時
能因 俗姓橘永愷、
代 白河天皇の御
歌人 後に出た
西行 俗姓佐藤義
清、鎌倉時代
の初に出た歌
僧で、始め北
羽上皇の北面
の武士であつ
た、建久七年
寂、七十三
宗祇 俗姓飯尾氏、
室町時代に
名和歌連に出
二年、文龜八
芭蕉 松尾氏、元祿
俳諧の巨匠と
七年、元祿と
十七年、元祿

は萱を刈敷いて、露けき假寢をするなどといふことが、歌の言葉の上での遊戯ではなく、本當にあつたのである。それにもかゝらず、昔から旅を喜び、旅にაცがれた人たちは、古今東西に渡つて極めて數多い。日本だけに限つて見ても、まだ交通も十分に開けなかつた萬葉集の時代の歌には、旅の感想をうたつたものが澤山ある。能因も旅をしたし、西行も旅をした。宗祇や芭蕉は旅から離せない因縁になつてゐる。西行が夏に畿内を發足し、鎌倉を通つて秀衡の屋敷に着いた時には、いつわが舊宅へ歸るといふあてはなかつた。そんなにしてまで、昔の人が不便な旅をなつかしんだあこがれの心は、今の都會生

秀衡藤原氏のあつた郷
基商のあつた郷
奥藤原のあつた郷
て平泉にありし陸
て源經のあつた郷
すけた人なつた郷
治三卒した文

活を送る人には、一層捨てがたく、はつきりと理解する事が出来るであらう。たとへば夏の休に、高山や海邊を旅することは最もよい。さうでなくて所用の爲にする旅行でも、一時間ばかり汽車に揺られ、ば、もうすつかり旅行気分になつてしまふ。その時の心の持方一つでは、所用の爲の旅行でも、それに深い意味を持たせて、つくづくと旅情のこまやかさを感じる事も出来る。急ぎの用でないならば、途中下車をして沿線から數里の所まで外れて見るのも面白い。交通の開けた今の日本では、鐵道から數里も離れた場所などはさうあるものではない。それに以前はがた馬車の喇叭

叭の響いた街道にも、驛馬の鈴の音が木の間を洩れた峠路にも、自動車の便がある。三十分も揺られると、都會の人が想像だもしない昔の姿そのままの岬や、山や、峽谷や、丘陵やに連れていつてくれる。忙しい生活の中で感じもしなかつた森嚴壯麗な景色や、明澄透徹の感じが、不思議にひた／＼と心に迫り、心はまた、不思議にときほごされて、自然の中に流れて行くのを覚えるであらう。この心持は、旅に親むもののみが恵まれた特權であると思ふ。實際、丘陵性の半島を自動車で横ぎるなどは面白い。夕ばえのかゝやかしい夏の午後、白い鷗ときそひつつ發動機船の岬角をめぐるのも面白い。眞夏溪谷を旅



するのよよいし、秋の密林を露にぬれつゝ、峠越しするの楽しいものである。夏に疲れた草が静に眠つて、薄のま新しい穂が白く見える丘や、蛇苺の赤い初夏の土手の木蔭で、蝮取りの笛を聞くと、夢のやうな世界が胸にうかんでくる。旅は心の故里へ人を誘つて行く。しかして、人の心を不思議なほど解きほごして、子供にし、感じやすくする。旅に浄められた人の心は、皆ひ



とかどの歌人の心になつてゐる。歌よむ人は平素にもまして、すなほな純情の歌をよむ事が出来、歌をよまぬ人の心も、歌よまゝほしき子供心にかへつて来るのである。そこで歌よむ人は、旅の途上の感懐を一首の短い歌に托して、永遠の記念碑をこゝかしこに建ててくる。それは尊い道標であり、これを建てる喜びは、人生に於ける最大の喜びの一である。鑑賞も出来、創作力も

ある人は、自分からして、荒れた曠野にも、雲ある峰にも、心の記念碑を建てて行く。たとへ創作をしない人でも、旅に心を休めるほどの趣味と、鑑賞力とのある人ならば、自分が今辿りつゝある山や、林や、海岸について、我が心に訴へる様な名作の存する時は、それに育まれて、一人の喜びを感じる事も出来るであらう。旅は人の心を浄める。旅はおしなべて人を詩人としてくれる。であるから、歌よむ人は一層歌人となり、歌よまぬ人も、歌よまゝほしきまでに純な心もちにさせられるのである。

(佐々木信綱―旅と歌と)

佐々木信綱
文學博士
國文學者

一三 奈良の初夏

一 若草山

若草山！ まあ何といふ優しい名でせう。櫻も散つて、是から躑躅や藤の季節に移らうとする時、一本の木もない、あの撫でたやうになだらかな山一面に、若草の萌出した時、そして、若草の間をとろろ山躑躅が鶉色に彩つた時、若草山の姿は實に優しい限りの眺です。紫の藤浪が池水に咲きかゝる頃、私は嘗て若草山に遊んだことを思ひ出さずには居られません。昔の人も、

藤浪の花は盛りになりにけり
奈良の都をおもほすや君

昔の人
大伴四繩
藤浪の
萬葉集にある

と歌ひました。藤の花の咲く頃、私は何時も奈良と此の

歌とを思ひ出すのです。



若草山は奈良の町の東方に在る山で、近所の山には木が鬱蒼と茂つて居るのに、これは木のない、草ばかり生えた山で、散歩がてら登るのに丁度よい山です。若草の芽の出る前、此の山の枯草を焼く時の光景はなかなか壯觀で、寒い風が奈良の大路を吹捲くたそがれ頃、門に立つと、春

日の森を越えて東の方に火がちら／＼と見えるのは、忘

れ難い旅の思出の一つであります。五月の頃の若草山は、それにも増した楽しい眺です。其の頃、町の人々は、大勢此の山へ遊びに來ます。そして、上方の風習として、年若い女は綺麗な長襦袢一枚になつて、山躑躅の咲亂れた山を登つたり降りたり、鬼ごっこをして遊び戯れたりします。旅の身の私は、若草に腰をおろして、しばらくそれらの光景に眺め入つたのでした。

二 春日野

奈良の附近には到る處古跡が多く、大きなお寺の屋根が森の間に見え隠れするのや、古い五重の塔が歴史を語り顔に霞んで見えるのや、畑の間に礎だけ残つて、其の石の

猿澤の池
奈良市三條通
の東端、興福
寺の南にある

割目に寂しく葎の咲出たのや、何れ昔の思出の種とならないものはありません。併し、あの優しい眺の若草山の麓、そこは春日野と呼ばれてゐますが、其の野ほど色々の語草に富んで居る處はありますまい。可愛い無数の鹿、春日神社の眷屬として奈良の人々が大切に居る鹿、そして、昔は其の鹿に危害を加へると、其の人は生きながら地中に石埋めにされたといふほど大切にされた鹿は、今もなほ群をなして春日野に遊んでゐます。又今はすっかり俗化しましたが、奈良名所の猿澤の池も春日野の一部と見られてゐます。猿澤の池から少し東に寄つて、可愛い鹿の澤山遊んで居

る緑の草原の間に、雪消ユキグの澤と呼ばれる小さな池があります。昔の歌にも、

春來れば
崇徳院の御
製、風雅集に
ある

春來れば雪消の
澤に袖垂れて

まだうら若き

若菜をぞ摘む

雪消の澤

とありますが、奈良朝の昔に、あの優美な衣を着けたうら



若い少女達が、おのが身の上にも似たうら若い若菜を摘んだのは、何處の池の畔だつたでせう。今は紫の色ゆか

しげな藤の花が長い房を水に垂れてゐて、四邊には只新しい時代の人々の翳す、赤や白のけばくしいパラソルの色が目立つて見えるだけです。

併し、千年も前の春日野には、只少女の遊ぶ姿ばかりでなく、もつと嚴しい光景をも其處に認められたのです。其の頃、春日野には「とぶひ」といつて烽火を高く揚げる處がありました。是は戦争とか、其の他國家に一大事の起つた場合に、高く火を揚げて急を知らせる爲で、春日野を飛火野と云つたのも、つまり此の理由からでした。そして、其の烽火の番兵達も此の野邊を徘徊したのです。さればこそ古の歌にも、

春日野の
識人不知古
今集にある

春日野のとぶひの野守出でて見よ
いま幾日ありて若菜摘みてん
などと詠まれて居るのです。
(天類伸—史蹟めぐり)

一四 壺の思出

私は子供の時分の私と壺との關係を、少し話して見たいと思ひます。
私は十四歳の時に母をなくしました。裏の井戸傍に、徑一寸ほどの實のなる大きな梅の木がありました。夏の初に其の實が四斗樽に漬けられます。そして土用になると、それが簀の上に廣げられて天日に晒されます。そ

して秋の初になると、徑一尺一二寸ばかりもある瀬戸焼の赤い鐵砂釉ナツシヤクの壺が、母の手に依つて低い板間の上に持出されます。それには口の邊に、黒い流釉ナカシヤクがかゝつて居ました。私は今でも、其の壺の様子をはつきりと思ひ浮べる事が出来ます。十分天日に晒された梅漬が、大きな盆に盛りあげられて、其の壺の側に置かれます。母は極めて熟練した手付で、庖丁で梅の實を縦に四つに割ります。そして、たねを去つて蓮の花のやうになつた其の肉が、紫蘇の葉で包まれて壺の中に並べられ、一段毎に鹽がふられるのでした。かういふやうにして、壺が梅漬でいっぱいになると、口にはびつたりと丸い板が當てられ、其

の上が澁紙で包まれて、口元を細繩で結へられます。出来上つた時には、母の口元に會心の笑が浮ぶのでした。壺はやがて、其の低い床の下に、土を掘つて深さ一尺五寸ほどに作られた窖の中に納められます。これは、私が物心づいてから母のなくなるまで、毎年きつと見られる年中行事のやうなものでした。紫蘇卷の梅が其の中に入れて、これが密封される、其の密封といふ事、それからそれが人目に觸れない冷たい窖の中に置かれる、其の窖といふ事、そして永い時日、其の儘そこに放置せられる、其の時日を待つといふ心持、さうしておく、だん／＼に壺の中の紫蘇卷にうまい味の出

て來るといふその不思議さ、是等の事柄は、結局、母の手に依つて處理される魔法の壺といふやうな、幼心には、玄妙な併しながら温い親しみを以て迎へられたものです。今でも母を思ひ浮べる時は、必ず此の壺がそれに伴なつて思ひ出されます。いたづら盛りの年頃には、よく此の壺の藏してある窖の上の低い板間で、めんこ遊をしたものでした。鉛のめんこが揚板の隙間から床下に落込んだ時、板をあげて、體を倒にして、床下に首を突込んで捜し求めたものでした。さういふ時でも、此の壺には、そつとして、觸れることを避けたものです。それは懼をもつてではなく、丁度眠つて

居る赤子に對する時のやうな温い心をもつてです。何歳の時の事でしたか、東京みやげに金山寺味噌を貰つた事があります。それは巾著のやうに首のくゞれた、徑四寸ほどの壺に入つてゐました。そして丁度釜の蓋の様な形の蓋で被はれて、其の上が紙で包まれてありました。私は其の壺が欲しくて欲しくて堪らなかつたものです。そこでこつそりと中の味噌を別の蓋物に移して、綺麗にそれを洗ひ上げました。後で祖母に見つかつて、大そう叱られました。併し壺は自分が自由に處理しても差支ないことになりました。私は嬉しさに壺を持つて座敷の中を躍り歩きましたが、思はず柱に打當てて、ひ

やりと息のつまるやうな気がしたことを覚えてゐます。それから此の壺を大切に布に包んで、抽出の中に入れて見たり、或は箱に納めて戸棚に入れて見たり、紫雲英の花を挿して佛壇に飾つて見たり、とつて來た鮎の子やめだかを泳がして縁先に置いて見たりしたものでした。そして遂には、鉛のめんこや、呼子の笛など、容積の小さい金屬製の玩具を其の中に納めて、土藏の傍の自分の庭、そこには裏の林から採つて來た小さい躑躅だの白百合などが植ゑてあつた、自分の庭に埋めました。そして其の上には小さい山を築き、前には池を掘つて、杉や松や楓などの芽生を植ゑました。なんでも近所の子供たちを呼んで

來て、何か儀式のやうな事をして、あとで物をたべたやうに思はれます。

池と山との間には鳥居や幡などを建てたのですから、昔の人の陵墓や社などを築く心持と同じであつたのでせう。さういふ書物を讀んで居たとか、人から話を聞いたとかいふ事はなかつたのですから、かういふ行爲は、子供の頭に自然に發する思想に基くものなのでせうか。こんなわけで、壺は地中に埋められました。そして日々其の前に來て考へる事は、壺と其の中に納められたものがどんな風になつて行くかといふ事でした。この考がだん／＼嵩じて來て、遂にはどうしても掘出して見なけ

れば氣が濟まなくなるのでした。それで壺は、一ヶ月とは土中に埋められてありませんでした。其の後此の壺がどうなりましたか、全く記憶に残つて居ません。



交趾壺

山期あたりの茶の全盛時代に、舶來の雜器、それは口の悪い人からえたいの知れないといふ形容詞を冠して呼ばれる雜器が、茶入や水指や抹茶茶碗などに用ひられて頗る珍重され、遂には金襴や其

他の名物切に包まれて、幾重かの箱に納められるやうになつた事などは、子供と大人との相違こそあれ、同様の心理に基くものでもありませんか。

(佐藤功一—中央公論)

佐藤功一
工学博士
早稻田大學教授

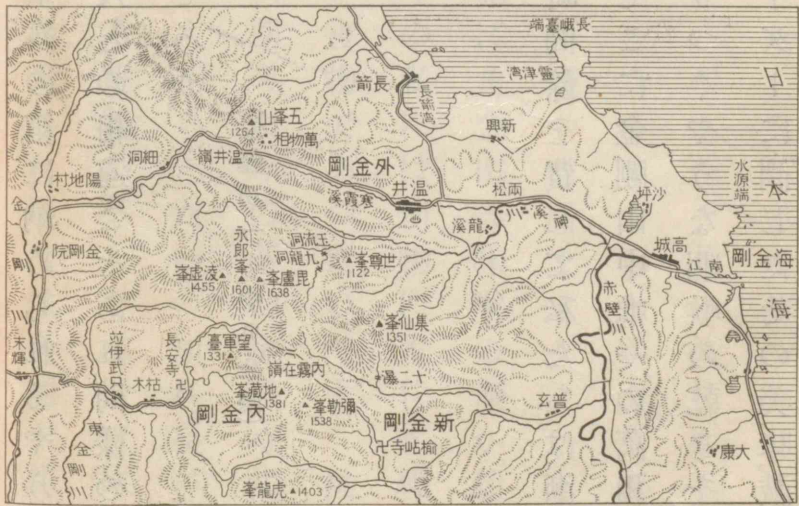
金剛山
朝鮮江原道の
勝景
温井里
外金剛にある
郡邑

一五 金剛山の景勝

一 萬物相

温井里から二里弱の道に、三時間餘を費して、私たちは漸く萬物相下に辿りついた。そこに金剛山中唯一の萬相亭と稱する茶店がある。煎りつくやうな咽喉の乾きを、氷のやうな山水につけたサイダーに潤したその美味、誠

にたとへるものもないほどであつた。私たちはこゝでゆる／＼辨當をつかつた後、茶店の主人を案内者として新萬物相へと志した。新萬物相へは、道と名づけるほどのものはない。萬相亭を左に見た溪谷から溪中の石を踏んで上るのである。密林に裾づけられた奇嶽が、溪谷の左右に亂立してゐる



ので、危い足下を踏みしめては、仰視しなければならなかつた。

七八町上ると、新萬物相の入口である。こゝは金剛杖も役に立たない。頂上まで手と足とで登るのである。五葉松や、樅や、檜の下生の灌木の枝や、岩角を手がかりに攀ぢる。時には案内者の肩が足場となつた。

とかくして、私たちは小さい岩臺の上に出た。臺は怪獸が天に咆哮するやうな形の大岩壁の側にあるのだ。玉女峰の名に呼ばれる新萬物峯の峯頭は、こゝから指を並べたやうに手近に仰がれる。もう殆ど大きい樹木はない。何百年たつても育ちえない、ひねた赤松や石楠木を

フイラック
紫丁香花、薄
紫の花をつけ
る

見るばかりか、ライラックの花がそこ、に咲き、空木が



濃い桃色の花をつけ、姫菖蒲が絶頂近い岩根に可憐の色を見せてゐた。私たちは遂に金剛門の下に達した。それは自然の大石門で、青い空がくつきりとそこから窺はれる。石門をくぐると、天地は洞然と開いて、千山萬嶽がわれに朝宗するの趣を呈する。見上げる石門の右壁に「金剛第一關」の

大文字が刻みつけられてゐるが、いかにもこの大景にふ

さはしい。今この第一關を踏み得た快さは、言葉につくせぬ喜びとなつた。が、私たちの頭上には玉女峰が聳えてゐる。その絶頂を極めなければ、かの玉女が化

粧水を湛へたと女

いふ自然の石壺峰は窺はれないのである。石壺は



三つ並んで、そこに神祕の靈水を満してゐるのだ。身を横にして懸崖の上を渡らねばならぬ處がある。跨

ぎえない深い岩の隙間を、身を無いものにして飛越えねばならぬ嶮難がある。全くの命がけであつたが、幸に私は無事にこの難所をすぎて、海拔三千五百尺の玉女峰の絶巔に立つた。一種の恐怖によつて色づけられた痛快さに、私は凱歌を奏したものの、足は戦々として慄へて居る。しかも眼前に展開する大觀の怪奇は！この大觀を記すには私の筆が餘りに小さい。峰の周圍は、劍のやうな奇峰が圍繞して百千の媚を呈してゐる。或ものは見上げ、或ものは肩を並べ、或ものは山と山の間から僅に覗く。かくて遠山近峰が波濤の如く重疊し狂瀾の如く空に湧立つ雄渾絶大な光景はたゞ々々黙して目を見は



洞簾水と相物萬山剛金

るより外はない。

玉女が新粧の水を湛へたといふ三個の石壺は、峰頂の岩を抱いて僅に俯瞰すると、直下百尺の平滑な岩面に順序よく並列して、神斧の妙を思はしめる。この自然の奇工に傳説の伴なふのも決して偶然ではない。

下つて萬物相を過ぎて、金剛山中の最も趣ある温井嶺越の路を辿つた。檜や赤松や楓が大密林を作つてゐるので、歩々石徑を踏んでその間を行く爽快さと、顧みて木の間から遙に日本海を望む明媚な風光とは、今までの威壓的な景色に引きかへ、忘れがたい親しみを覚える。

二 水簾洞

外金剛の雄を萬物相とすれば、内金剛の代表的溪谷は萬瀑洞であるといふに躊躇しないが、密林に蔽はれた幽邃なる溪谷としては、まづ靈源洞を挙げなければならぬ。別して、望軍臺から水簾洞の邊に達する二三十町の間は、眞に幽邃の極致である。

この峽谷には、山頂から轉落した二丈三丈の巨岩が累々として横たはり、それを受けてゐる地盤も、流水の削磨によりて鏡のやうに磨き上げられた花崗岩盤である。急湍はその岩盤の上を音もなく亘つたり、岩塊に遮られて激したり、潜つたり、或は飛瀑となり、或は深潭となつて、千百の水の美觀を構成する。しかもその上は常に鬱蒼た

る老樹に蔽はれてゐるので、そこに幽邃にして神祕な色彩が加味されてゐる。時には陰濕な溪谷を好む山木蓮が、水に臨んで純白の花をつけ、谷中にその香を満たしてゐる。この花は一輪を手にとると、強烈な香が堪へられぬほど嗅覺を刺激するが、それが梢についてゐると、えならぬ香氣を全谷に漂はせる。幽徑に人影もなく、たゞ水聲禽語のみを聞く時、いづこともなく薫つて來るこの木蓮の香氣が、この谷に附與する靜寂の感じは、その境を踏まぬものの想像し得ないところである。

私たちは溪流をはなれて密林に入り、密林からまた溪流を横ぎりながら進むのだ。林は多く樅や檜や楓樹で、か

つて斧斤の禍を知らぬものである。下草のつゝじや大きい羊齒が、多くは朽木や枯葉に埋もれてゐる中を、僅に山僧の通ふ細徑がおぼつかなくも通じてゐる。往々日の目を洩らさぬところがあつて、太い葛蘿が大蛇のやうに垂れ、何百年の老木が自然に朽ちてゐる原始的な風光の中であるから、踏んで行く落葉枯葉の音にも、自然のささやきを聽く心地がする。また縞栗鼠が多くて、足音に驚きながら半身を起して、木の枝や岩角のかげから、ちつと私たちを見まもつてゐる。杜鵑も時々谷をかすめて鳴過ぎる。山鳩の遠音がほろ／＼と聞かれた。山簾洞水簾洞まではよほどの上りで、しかもかなりの難所を越

えなければならぬ。しかし、そこまで行き着くと、誰でも思はず行手に展開する美觀に見とれずには居られない。そこには二百尺ばかり、約四十度の傾斜をなす白色のつや／＼しい一枚岩が谿一ぱいになつてゐて、その上を浅い水晶のやうな水が、四五尺の幅に、波頭のやうな波紋をえがきながら、音もなく押擴がつて滑つてゐる。水簾の名がいかにもふさはしく、さながら造化が永遠に

水 簾 洞



小止みなくそれを繰出してゐるやうに見える。この水は廂のやうに突出してゐる大きな岩の下に流れこむので上部の落口には、徑三尺、深さ六尺ほどの規則正しい壺の形をした自然の穴が穿たれてゐる。一度そこに落込んだ水が、渦巻きながら流れ出るのも奇觀である。殊に楓の枝が面白くその上にさしかゝつてゐるなど、いかにもよい構圖で、この瀧に繪のやうな感じを與へる。

(菊地幽芳—金剛山探勝記)

菊地幽芳
名は清
小説家
大阪毎日新聞
記者

一六 山寺

眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨

はと思ふと、何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝手元の方に耳を澄まして、何の音もせぬ。暫くすると、朗かに啼く鳥の聲が耳に入つて來た。何とまあ、鳥の種類が多いことだらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出して見ても、とても數へきれぬほどの種々な音色が、枕の上に落ちて來る。私はこらへきれなくなつて飛起きた。そして雨戸を引きあげた。照るともなく曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次とたゞ靜に押並んで、見渡す限り微な風の氣勢もない。それからそれと眼を移してゐた私は、ふと、杉の木立の間に、遙に光る所を見出した。

麓の琵琶湖である。どこからどこまでと、その周囲はわからないが、とにかく朧々とその水面の一部が輝いてゐる。



比叡山 (川村曼舟氏畫)

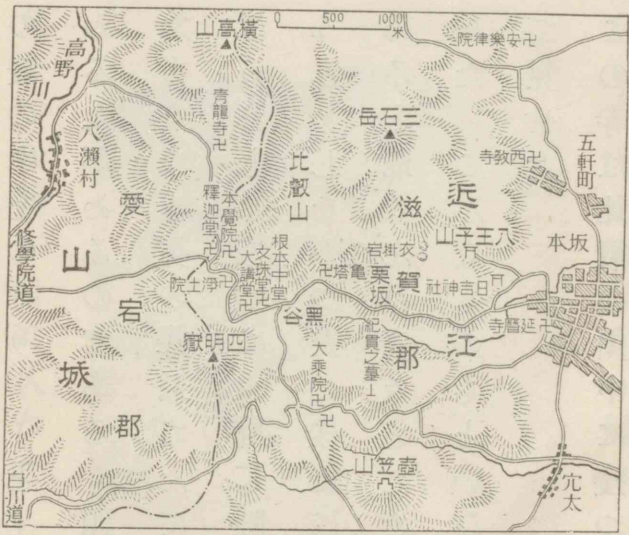
餘りに靜な
眺なので、我
を忘れてぼ
んやりとそ
こらを見廻
してゐると、

又一つの物が目に入った。眼前からすぐ落ちこんで行つてゐる窪地一帯は、ちやうど溪間のやうになつて僅か

の間杉木立がとだえて、細長い雜木林になつてゐるが、その藪の中をのそりくと半身を屈めながら、何か探してゐる人があるのである。頭を丸々と剃つた大男の、まがふ方なき寺男の鬢爺さんである。それを見ると、妙に私はいれしくなつて、大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうともしなかつた。後庭に降りて、笥の前で顔を洗つてゐると、爺さんは青々とした野生の獨活ウツクサをさげて歸つて來た。「こんなものも」といひながら、笥をも二三本取出して見せた。

この寺は、比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺の中、最も奥に在つて、又最も廢れた寺であつた。住持もあるに

根本中堂 延曆七年傳教大師の創建
 淨土院 傳教大師の廟
 四明嶽 比叡山の最高峰 二七二三尺
 元黒谷 山城國愛宕郡八瀬村の東



はあるが、麓の寺とかけ持ちで、何か事のある時の外めつたには登つて来ず、年中殆どこの寺男の爺さんが一人で留守居をしてゐるのである。四方たゞ杉の林があるのみで、しかも溪間の行きどまりになつた所に在るので、根本中堂だの、淨土院だの、釋迦堂だの、又は四明嶽、元黒谷などへ往來する參詣人たちも殆ど立寄ることなく、まる一週間滞在してゐる間、私はこの

傳教大師 最澄のこと、近江滋賀の勅人、延曆十二年勅を奉じて唐に渡り、二十二年弘仁朝に於て、五年、五十六年寂

金聲の爺さんの外、人間の顔といふものを見ることがなくして過してしまつた。多いのはたゞ鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大師の一千一百年忌に當つたといふ舊い山、そして五里四方に亘ると稱へられる廣い森林、その到る所が殆ど鳥の聲で満ちてゐる。朝最も早く啼くのが郭公である。「くわつくわう。くわつくわう。」と啼く。鋭くして澄み、しかもその間に何ともいひ難いさびを持つたこの聲が、山や溪の冷たい肌を刺すやうにして響き渡るのは、大抵午前四時前後である。この鳥の啼く時、山は全く鳴りを静めてゐる。「くわつ」と

鋭く高く、さうして直に「くわう」と引くその聲が、ほゞ二つか三つ、或場所で續けざまに起つたかと思ふと、もうその次は、違つた或頂上か溪の深みに移つてゐる。暫くも同じ所に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見せたことがない。

杜鵑も朝が多い。これは必ず最も高い梢でなくては啼かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取亂して啼きたてることがある。その時は、例の本尊かけたかの律も破れて、全く急迫した亂調となつて來る。日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感じず。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢へ飛渡

る時の姿が誠に好い。それから高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾の一尺くらゐ長いのがゐて、細々と、實に細々と息を切らずに啼いてゐるのがある。これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連ねてゐるのを見る。日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える時、どこから起つて來るのだから、大きな筒から限りもなく抜けだして來るやうな聲で啼きたてる鳥がゐる。始もなく、終もない。聽いてゐれば次第に魂を吸取られて行くやうに、寄邊ない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打ちに烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せ

ぬ。聲に引かれて、どうかして一目見たいものと、幾度も私は木の雫に濡れながら林深く分入つたが、終に見ることが出来なかつた。筒鳥といふのがこれである。筒鳥の聲は、極めて圖抜けた間の抜けたものであるが、それを稍、小さく、且人間くさくしたものに呼子鳥といふのがある。初め筒鳥の子鳥が啼いてゐるのかとも思つたが、よく聞けば、全く異なつてゐる。山鳩にも似、又梟にも近いが、そのいづれとも違つた、やはり呼子鳥としての言難いさびを帯びた聲である。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一齊に、そここの溪から峰にかけて啼きたてる。茫然

と佇んで耳を澄ます私は、身體全體の痛みだすやうな感覺に襲はれることが再々あつた。

(若山牧水―比叡と熊野)

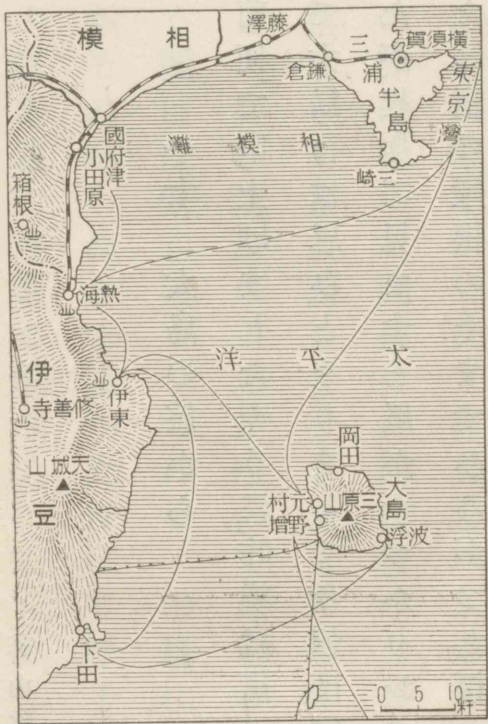
若山牧水
名は繁
歌人
昭和三年歿、
年四十四

大島
伊豆列島の

一七 大島の旅から

前便で申上げましたやうに、昨晩は嵐でございましたので、大島行は思ひとまりました。今朝は歸らうと存じましたが、起きて見ますと風がすっかりおさまつて居りました。宿の屋根の上までひろがつた榎の木の小枝が、ゆふべの風に折られて庭のそここのに散らばつて居りますのを、少し心細くながめました。が、からりと青空に陽がの

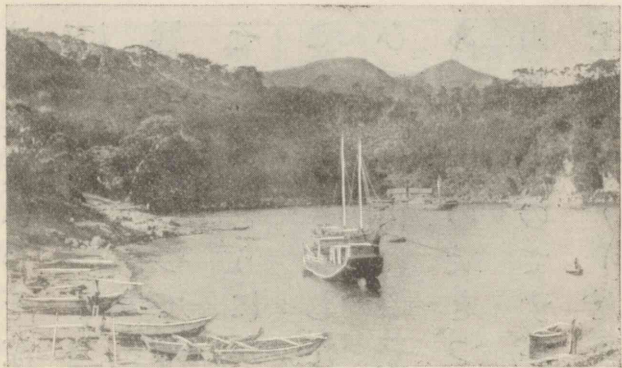
伊東
田方郡の東海
岸、熱海の南
五里



ぼりましたので、又大島へまゐることに致しました。朝八時、伊東を出ます時は、おだやかでございましたが、沖へ出て見ますと、なか／＼の風で、飛の魚が目の前をかすめて、すつすつと飛ぶのもあまりよい心持ではございません。越しました。小さい和船は、沖に出ますほど高い波の山を

ちて來ますので、着物も帯も拭ふ間が御座いませぬ。しまひには、いつそ涼しい位の氣持で、顔も頭も潮の洗ふのにまかせました。一行五人、私をのけました外は、みんな唇の色を失つて舟の底に横になつてしまひました。それでも、どうにかかうにか、お晝頃元村へつきまして、こへ落着きました。伊東を出ます時は、みんな大した勢ひで、三原山にも登りませう、爲朝の遺跡もたづねませう、あぢさゐの咲きつゞく野も歩きませうなどと申合つて出ましたのですが、海を渡つて宿へつきますと、すぐ頭の上にく／＼とよつてゐた三原山の煙を見ましても、誰も何とも申しませぬ。

爲朝の遺跡
源爲朝が流された時の館のあつた地



あいさつに來た宿のおかみさんの驚くほどの多い髪の毛も、お晝飯の給仕に出た島の女の帯なして幅の廣い前掛をかけた姿も珍しうございました。一同少し元氣になつて、お箸をおくと、二階から見渡す限りの木といふ木が椿であるのに先づおどろいて、散歩に出かけました。

一まばらながら、軒をならべて呉服屋もあれば氷屋もございます。道の端には赤い松葉牡丹の大きな花が、つまれもせずに見事に咲いてゐます。頭の上に薪をのせて眞直な姿勢で歩いて行く女、鎌を腰に草を積んだ牛を追ふ女、見るものは皆珍しうございますが、素足にはいた宿の下駄でふむ砂のあついのには困りました。爲朝の館のあととは、もうございませぬが、近頃海岸に碑を立てたと申すので、宿の番頭を案内にしてみました。熱い砂を踏んだ足で冷たい草をふむ心地よさに、生きかへつたやうになりました。椿の木の下に山あぢさゐの澤山さいた中を通り抜けて海岸へ出ますと、一丈もあらうかと思はれる石の記念碑がございました。青い海を越して遠くに富士が見えました。

一まばらながら、軒をならべて呉服屋もあれば氷屋もございます。道の端には赤い松葉牡丹の大きな花が、つまれもせずに見事に咲いてゐます。頭の上に薪をのせて眞直な姿勢で歩いて行く女、鎌を腰に草を積んだ牛を追ふ女、見るものは皆珍しうございますが、素足にはいた宿の下駄でふむ砂のあついのには困りました。爲朝の館のあととは、もうございませぬが、近頃海岸に碑を立てたと申すので、宿の番頭を案内にしてみました。熱い砂を踏んだ足で冷たい草をふむ心地よさに、生きかへつたやうになりました。椿の木の下に山あぢさゐの澤山さいた中を通り抜けて海岸へ出ますと、一丈もあらうかと思はれる石の記念碑がございました。青い海を越して遠くに富士が見えました。

夕飯後島のお婆さんが来て、大島節をきかせてくれました。年は七十位の、島で一人二人といふほどの聲の好い百姓家のお婆さんださうでございますが、座敷へまゐりまして、手拭を頭にかぶつたまま、それでも白扇を持つて拍子をとりながらうたひました。お婆さんが歸りました後は、めい／＼に繪葉書を書きはじめました。私もこの手紙を書いて居ります。あたりはひつそりとして夕月が淡く三原山にかゝつて、くらしい椿の木のかげに牛がないて居ります。潮風がつよいのでおすゝしく、蚊も少なうございます。明朝は五時頃に起きて三原山に登らうと存じます。登山の様子は又明

日くはしく申上げます。
末ながら御奥様へよろしく御願ひ申上げます。

八月五日

嘉代

岡本先生
岡本綺堂

岡本先生御前

いま、月に水を汲む島の女の大島節が、波の音の絶間に
きこえて居ります。
(天村嘉代子―女流名家書簡選集)

大村嘉代子
劇作家
日本女子大學
講師

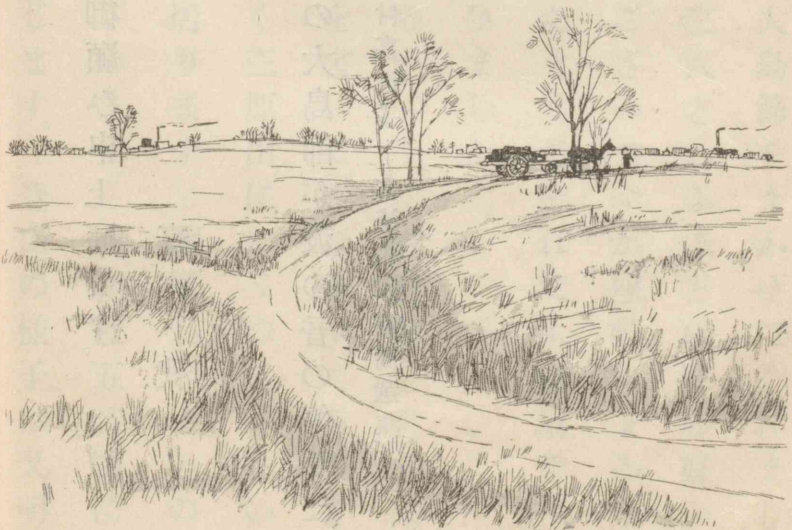
一八 雑草

雑草こそは賢けれ
野にも街にも人の踏む
路を残して青むなり

雑草こそは正しけれ
如何なる窪も平らかに
圓く埋めて青むなり

雑草こそは情あれ
獸のひづめ鳥の脚
すべてを載せて青むなり

雑草こそは尊けれ
雨の降る日も晴れし日も



與謝野晶子
與謝野寬氏夫

歌人
評論家

涙の泉
大正二年三月
二十八日飛行
中墜落惨死を
遂げた徳田中
尉未亡人菊枝
子がつた書信
の一節

おちぶれて
云々
おちぶれて袖
に涙のかゝる
時人の心の奥
ぞ知らるゝ
(作者不詳)

一九 涙の泉

ほゝゑみながら青むなり

(與謝野晶子―若き友へ)

〔前略〕よくこそ泣けと仰しやつて下さいました。「泣け」と仰しやつて下さったお方は、あなたばかりです。泣きま
す、泣きまます。私はどうして此の事が諦められませう。
「去る者は日々に疎し」といふ世の中に、ほんとに嬉しいあ
なたの御心。
尊に聞けば、私が澤山なお金を戴いたので、何たる仕合者
だらう、羨しいと仰しやつた奥様方もおありとか。おち
ぶれて袖に涙のかゝる時、始めて様々な人の心を知り得

ました。なるほど、皆様の厚い御同情のお蔭で、物質上には何不足のない身となりました。併し破れた心、荒んだ胸の此の痛手は、たとひお金の山を積んだとて、それで購ひ得られませうか。手鍋さげても、月洩る賤が伏屋でも、夫婦親子揃つての幸福に優るものが外に御座いませうか。嗚呼、三月二十八日、思つても身が戦きます。

徳田木村兩中尉記念碑



わぎもこと春のあしたに立別れ

空のまひるの十二時に死す

晶子
與謝野晶子

飛行場
埼玉縣所澤町
に在るものを
指す

と晶子様のお歌の通りで御座いました。「晝は歸るよ」と出て行つた門口、ふと足を止めて、後を振り返つた其の面影、それが私の見た此の世での最後の姿で御座いました。「歸る」と云つた家には歸らず、恨は盡きぬ飛行場の一隅、觀測所の一室で、此の世に遠い姿に接した時、お察し下さい、あなた、私は——こんな意氣地なしの私でも——強い女になつて居りました。涙一滴こぼしませんでした。あゝ其の時、冷たい骸に向つて、吾が世のかぎり心のかぎり泣いたなら、こんなに思が残りはしなかつたらうにと

中野 東京府豊多摩
郡、東京市の
西郊一里許
大久保 同郡大久
保町、當時作
保町、同郡大
親族は此の町
居住してゐた



像銅尉中二田徳村木の碑念記

思はれます。 どうしてこんなに愚痴なのでせう、まだ良
人が、此の世の何處かに生きて居るやうに思はれてなり
ません。 道を歩いて、電車に乗つても、軍服を着けた人
さへ見れば、いつも亡き人を思ひ出します。 お笑ひ下さ
いますな、せめて夢にでも見たいと思ひます。 これもや
はり女の愚痴なのでございませう。

忘れもしません、あなたにお目に懸つたあの日で御座い
ました。 あの日は、中野まで用事があつて参つたので御
座いました。 中野は氣球隊のある處、良人は其の隊附で
御座いましたので、色々の事が思はれて、感慨無量の中に
大久保まで歸りましたら、圖らずあなたにお目にかゝり、

二人の子供
淑子と晃一

飛鳥川
大和國に在り
初瀬川に入る
古今集雜下
「世の中は何
か常なる飛鳥
川昨日の淵な
る今日に瀬にな

の子の手を引きながら、何やら打語らひながら夕靄の中
に消えてしまひました。嗚呼、半年前までは、淑子もこん
なにしていゝて居たものを、此の世に在さぬとは知らな
いで、あんなにして尋ねてゐる心のいぢらしさ。私はも
う堪へきれないで、人目のないまゝに淑子を抱締めて暫
くは泣崩れました。

朝夕御靈に禮拜する毎に、二人の子供も必ず側に來て、手
をついて拜します。其のいたいけな姿を見る毎に、胸が
張裂ける思が致します。承れば同じ學びの庭の友垣の
中にも、不運、悲運の魔の手に捉はれて居られる方もおあ
りになるとか。誠に水の流と人の身は、昨日に變る飛鳥
川、今更ながら身にしみ渡る浮世の風、泣いても泣いても
涙の泉は盡きません。あゝ此の涙、残る半生の慰は、唯こ
の熱い涙ばかりで御座います。(下略) (徳田菊枝)

二〇 お茶の客

娘の學科の復習のために、この二月ばかり、毎日午後通つ
てきてくれたKさんが、お八つの時に、近頃お茶を習つて
ゐます、なか／＼おもしろいものです。おうちでもおや
りになりませんか。とすゝめた。

僕も、父の生前、よくお茶の客があつて、「お前もお坐り」とい
つて人數に加へられたものである。よく手前もわから

花月庵流
花月庵鶴翁を
始祖とする煎
茶の一流儀

ずたゝ足がしびれて難儀であつた。もはや二十幾年も前のことである。それは青い粉を、茶碗の中で、茶筌といふささらのやうなもので、しやしやしやとかき廻して、あぶくをのむあれだつたが、今度のKさんのは花月庵流とかいふ煎茶で、「ちよつと簡單に出來ますし、ぢき覺えてしまひますから」と云ふのである。

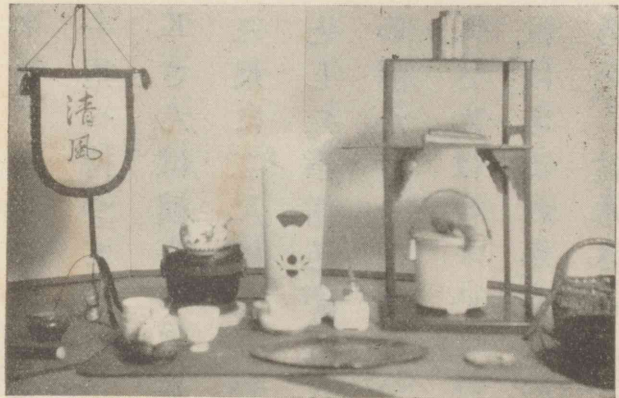
「お茶などを習つてゐるどころではありません。何しろお客が來て玄關に出てゆくと、お留守ならば奥さんにもお目にかゝりたいと言はれて、本人よりも先方に赤い顔をさせるやうな生活ですものね」と妻は笑つてゐたが、Kさんは熱心で、「ともあれ一度御覽に入れませう。道具

を持つてまゐりますから」と云ふことになつた。

ちやうどそのあくる日は日曜Kさんは鬱金木綿の包を一抱へ持つて來た。「二階の八疊、かういたしませうか」と、Kさんは襖寄りに並行して座をつくる。「先づ取出した三尺に二尺ばかりの絨毯じゅうたんみたやうなもの、そのぼつてりとした紫紺色が疊に置かれると、すぐ一種いひやうのない静かさを四邊にひろげて、もう氣がおちついて來る。」

Kさんはつゞいてひよろ高い素焼の爐を正面に据ゑた。ははあこれか、支那の畫などによくあるが、これはおもしろい。盆水さし——箸を立てるものと布巾をいれるもの、この二つの陶器は小さくて、その藍色がいかにも快い

ものだ。



煎茶道具

とである。

「どつさり持つてまゐれないもの
ですから、ほんの略式だけを」とK
さんは道具の少いことを斷つて、
水の用意などをする。妻もいつ
か市松の上張りをとつて、臺所か
ら上がつて來た。僕が右の端に
すわると、つゞいて、近所なので呼
寄せた妻の姉、子供達、妻などの順
序で、一座のお客は五人といふこ

お茶といふと、一概に窮屈で、うっかり物を云つてもいけ
ないやうに思はれてゐる。餘り眞面目になつてゐると、
何かをかしくなつた時は堪らなくなる。妻も内々それ
に閉口してゐたのだが、禮式も何も知らないものが初め
て「お客になつたどすれば、たゞ自由にする外はない。
「どうせ略式ですから、お寛ゆるぎになつて」
とKさんは言つて、やがて始まることになつた。
Kさんは敷居のところへ膝をついて、「一煎いちせんさしあげます」
とあたまを下げた。どうもかう改まつてくると、をかし
くなりさうである。それをぢつとこらへてゐると、心は
却ていつか靜な世界へと入つてゆく。Kさんは立つて、

左手に水さしを、右手に水こぼしを持つて、兩方を左の傍にまとめ、て、そ、そ、と歩を運んだ。その形がまたをかしくなりさうで、それも亦こらへきると、ますく心は靜になつてゆく。爐の前に坐つたKさんは、やがて炭取りから小さく切つた炭を挿み上げて、爐の中においた。これから何をするのかと思つてゐると、Kさんは、二寸四方位の、小さな、芭蕉の葉か何かで編んだ團扇を、右手の指の間に挿んで、柄を長くさし延ばして、軽くばた／＼と爐の口をあふぎはじめた。爐の口がいやに大きいところへ、この團扇の小さいのと、それをあふぐ手つきとが變にかしくなつて、いよ／＼たまらなくなつた。

「ははあ。」

僕はいきなり吹出すところを、この不得要領な感歎詞でおさへた。一つは先刻から女連が堪らなくなつてゐるのを察したので、同じやうに靜な世界へ導かれつゝ、さすがに女同志の遠慮から、笑つてはすまないところへてゐたらしいのを、このとき僕の思ひがけなく洩らしたやうな聲の方に、このをかしさを移させて、一座を寛がせようとしたのである。

「講談にある荒茶の湯の形だね。」

「お靜かでないものですね。」

と、妻の姉はKの方に言つた。

「はあ」とKさんはうなづいたまゝ、ばた／＼／＼をつゞけてゐる。

まづ火を起してから水をわかす。このぶんではお茶一杯がなか／＼いたゞけさうもない。

「時間はどの位かゝるものですか。」

と、僕は朝のうちつぶれてしまふ覺悟できいてみた。

「まづ三十分でございませぬ。」

「ははあ、火のおこるのがですか。」

「いゝえ、一煎が——一煎と申しますとお茶三杯で、初め

から仕舞まで三十分位としてございます。」

「ほう、三十分で済むのですか。然し火をおこすのが大

變でせう。」

僕の家庭では瓦斯ばかり使つて、平生火鉢にも炭をつがないから、ばた／＼／＼は一通りならぬ事業と思つたのだが、もう見るまに、純白な小さな急須の水は沸々と沸いてたぎりはじめた。案外早い。

「このたぎり方が、むづかしいのだと申します。初めは魚の目、それから蟹の眼になるのださうでございませぬがね。」

「魚の眼に蟹の眼。」

五歳になるみな子が、母の膝のそばで唱歌のやうなことをつぶやいたので、みな笑つた。

急須が湧くと、おろして膝の前の盆の上においたKさんは、手早く蓋をとつてその中へ一塊の茶を投込む。

「かうして入れますと、お茶はいくら飲んでも胃をいためませんさうです。」

小さな茶碗に一たらしづつ注ぎわけて、それを僕の前から次々にさし出されたとき、いよ／＼荒茶の湯の型でゆくほかはなかつた。

「どう持ちますか。」
茶碗があまり小さ過ぎるので、両手の中に這入つてしまふ。右手にとつて、左手に支へて口のところへ持つて來たが、ほんの底の方に黄ろくあるだけで、二口半にも二口

にも足らない。ぐつと飲みほしてみたが餘り呆氣なくて、どんな味がしたのか、どうも普通と違つたところがないやうな氣がする。勤先で、仕事の一片づき濟んだ後に、給仕が持つてくるのとはよほど違ふものの、この魚の眼蟹の眼の水の味は更なり、どうもこの茶を、玉露とも池の尾ともわかるまでには一通りの修業ではないやうだ。とろりと舌の上に一滴ころがして、眼でもつぶつて味はふやうな暇もなく、鈍くなつてゐる私の味覺には、たゞ淡淡たるばかりである。二杯、三杯——かうして一煎は終つた。
「どうぞおよろしければ——」。

とKさんは、今度は急須のまゝ、僕のの前へよこした。僕は舌のあひだの羊羹のしまつをつけるために、もう一杯茶碗について急須を次へ廻はした。妻の姉も一杯ついで次へ廻したが、これで妻のところの茶碗には、もう急須の中に一滴も残つてゐない。妻はからの茶碗を兩手にもつて、飲むやうな眞似をして變な顔をしてゐる。

「一杯には、ほんの少し注ぐのでございます。先刻差上げましたのも、ちと多い位なので――」。このお茶の味、妻のところまで廻つてゆかなかつたことをKさんは言譯らしくいつたので、僕は、
「僕が注ぎ過ぎましたね。どうもがぶく、飲まない」と

飲んだ氣がしませんね。」

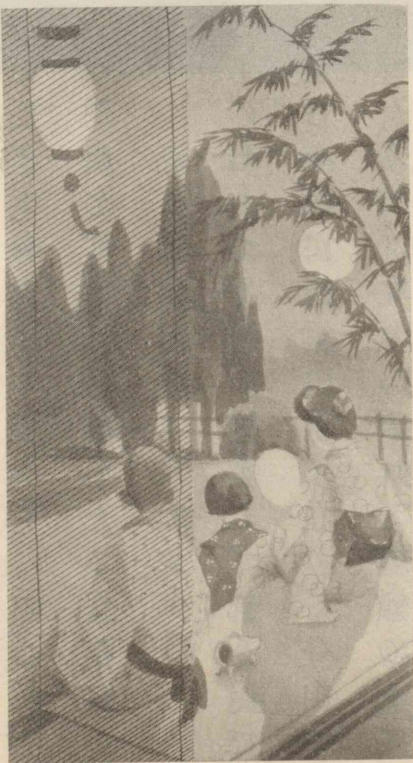
一座はまた靜に笑つた。日曜には家族をすつかり散歩に出して、僕一人で留守番をすることになつてゐたが、お茶や謠曲の日曜もおもしろい。忙しい忙しいと、まるで人生に借りでもあるやうにあくせくと暮らす都市居住者が、こつねんと爐の前に坐ることもおもしろい。小さな芭蕉團扇の柄の先の方を指の間に挿んで、ぱたぱた、この靜な音をたのしむ心に徹したいと思ふのである。

(王岐善磨―朝の散歩)

二一 夏の小暦

七月初旬の曇天は、續いて月の末に至る事あり。又中旬より晴れて、赫々たる炎威を恣にすることあり、茲に至りて、人は始めて夏の暑さを感じず。夏は、曇りたるより照りたるぞよき。碧空に日の光きらゝかに輝きて、金をも鏢さん日、靜に机に向ひて書を讀むも興なきにあらず。黄塵の堆き中におのが業にいそしむも、亦自ら樂みあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつゝ、靜に華胥に遊ぶ暇あらば、如何に嬉しからん。日の暮るゝを待ちて、檐の岐阜提燈に火を點じ、縁に花塵敷きて、團扇搖がしつゝ、一家團欒の物語に耽る、眞に得難

き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし、空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指しあはん。月あらば殊更なり、梧桐、寒山竹の間より、研ぎすましたる鏡の如き光を仰がんに、晝の暑さも忘れ果つべし。



幼き頃田舎にゐて、垣根の杉などを手折り來て、古摺鉢に灰少し入れて、蚊いぶししたることを思ひ起す。蚊遣火は趣深きものなり。そことも知らぬ森の中に、ゆくりな

く立ちあがる蚊遣の烟、こゝにも人住めりやと懐し。
 夏の旅、殊にをかし。日盛りの二三時間を、松並木の涼し
 き休茶屋に寝て過し、朝と夕に歩みても、日永き頃なれば、
 冬の日よりも却つて長き里程を歩み得べし。田舎道の
 休茶屋などに、清き水湧出でて素麴を冷したる、食指自ら
 動く。
 登山も夏の面白きものの一つなり。輕装して都を出で、
 遙に連山の蒼翠を望む、心既に白雲の上に在り。登山の
 快味は絶巔に登り得たる時に在り。されど絶巔の上に
 至るの努力も、亦快味の一なり。喘ぎ喘ぎつゝ登るに、森
 林盡き草原盡き、高山植物盡き、遂に岩石磊々たる處に達

す。一望誠に天下を小とするの思あるべし。登るべき

木曾 長野縣西筑摩郡木曾川沿岸一帯の汎稱
 御嶽 信濃・美濃・飛騨の國境、海抜三〇六三米
 乘鞍が嶽 飛騨・信濃の國境、海抜三〇二六米
 槍が嶽 同上、海抜三〇一七八米
 白山 加賀・飛騨の國境、海抜二七四〇米
 立山 越中の最高山、海抜二九九二米



日本アルプス（槍が嶽）

山は富士山を始め、木曾の御嶽、日本アルプスの乘鞍が嶽、槍が嶽、北陸の白山、立山など。山深く谿流清く、翠嵐搖曳たる處殊によし。海ならば絶海のほとり、怒濤天を捲く邊に行くを要す。世の常の海水浴場など、徒らに暑さを増すの料たらんのみ。

七月中旬乃至下旬より、晴れたる空は、年によりて多少の

相違はあれど、十五日乃至二十日續くべし。此の照りによりて、稻も其の穂を成長せしむ。此の照り此の暑さの稍緩む時、即ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて夏の雨しきりなり。

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空現れ、日の光射すかと思へば、白き黒き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として至る。物干竿の衣を取入るゝ暇もなし。其の雨量比較的に多く、處によりては河水氾濫し鐵道不通になること往々にしてあり。避暑に行きて此の雨に逢ふは、佗しきかぎりなり。海も佗し、山も佗し。避暑に行く人は此の雨以前に赴くをよしとす。

歐陽修
宋の政治家、
文豪、唐宋八
家の一人

田山花袋
名は鐵彌
小説家

蜀山人
即ち太田南畝
天明・文化・
文政
天明は十代將
軍、文化、文政
は十一代將軍
頃

此の雨霽れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間叢裡、既に秋の聲あり。梧桐芭蕉は殊に此の聲を聞くに佳し。歐陽修が秋聲賦の思ひ出さるゝは此の頃なり。雲の色、雲の態、稍趣を變ふ。奇峰漸く少く、白き雲多し。夜、稻妻の遠く光るも此の頃なり。一閃毎に、闇の中の雲の姿を明に辨じ得たる、言知らず面白し。田の面には涼しき風吹きわたる。

(田山花袋―花袋小品)

二二 蜀山人の盆燈籠

天明より文化、文政まで、久しく文壇の牛耳を執り、寢惚^{ネボケ}先生の名に、世人の眼をさましたる太田南畝翁の事蹟につ

きては、面白きこと頗る多し。今左に其の一つを記さん。文化元年の頃とか、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ、行燈燈籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしが多ければ、力を落し、情なき



神樂坂
東京市牛込區

顔してかつぎ歸りしが、太田南畝翁方へは常々出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所のものに向ひ、偕々困る事かな。此の盆はいかにして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れのこり候。此の分にては明朝神樂坂の市に持行き候とも、又今朝の如くなるべし。もとより手細工にせしことにはあれど、いさゝか資本もかゝりたり。此の分にては、水も吞まれ申さず。とかこちけり。南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや」と問はるゝにぞ、傍の者、斯様々々にて、又かのぐづ男が泣き申し候。と言ひければ、翁は臺所に出でられ、偕も氣の毒なることよ。

顯の下が乾きては誰も難儀ならん。我が言ふ如くせば、少しは賣れる事もあるべし」と言はれければ、そは有難き事に候。いかに致すべきかと、翁の顔をいかにも有難げ



蜀山人

に仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、これにて其の燈籠を張替へよ。我それに何か書きてやらん」と言はる。悦びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持ちきたれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつゝ、一禮を述べて、荷ひ歸りながらも、蓮の花を紅入りにて書い

二百疋
一兩の二分の

てさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書の反古張にては、買手はあるまじ。さりながらあれ程に仰せられしものなれば、先づ明朝、神樂坂の市に持行き、賣残りたらば、其の事を申して歎きつき、二百疋も借りて外商ひの資本とせん」と、工面顔にて、足も重く二三町歩む向ふより、侍一人行きすぎしが、供の者に言付けて、其の燈籠は賣物か」と問はしむ。さてはと悦び、いかにも賣物に候。やう／＼傳ツテを求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、此のやうには入り申さず候。お望ならば差上げ申さん」と言ふに、價はいか程ぞ」と問ふ。いくらと言ひてよき事やら、庄助はたと行詰り

五十文
九百六十文で
一貫、六貫三
兩百文ほどで一

しが、思ひ切つて、「五十文」と言ふ。「その値にて二つくれよ」と、百文渡して買行きたり。又跡より通りかゝりし人、それ賣るならば買ひたし」と言ふ。今度は息を一杯に吹き、て、「六十四文」と言ふ。言ふがまゝに又買行きたり。あとより又「此方へも二つ」我にも一つ」といふ有様にて、己が家に歸るまでに、二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つて斯くと女房に話せば、誠に寢惚様は生佛様なり、有難きことなり。明日は早くより持出で給へ。私も参りて手傳ひ申さん。一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても、五十と百の損なり」と、女の智恵の慾が先なり。

七つ
午前四時

翌朝夫婦は、にこ／＼七つ起して神樂坂に行き、並ぶる間もなく、蜀山人の書いたる燈籠とは珍し」と立ちどまりて價を問ふ。庄助思ひ切つて、「百文」と言へば、「さもあらん」と、百文にて買行く。女房、夫の袖を引き、「百にても値切らずに、大勢買つて行かるゝからは、二百文と言ふとも賣れ申さん、二百文と言ひ給へ」と、又智恵をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百は餘り高かるべし。百五十文にせん」と言ふ。それより百五十文にて六七十賣り、つひには先見明かなる其の妻の言の如く、「二百文よりまかりませぬ」と、肩を怒らして賣り、まだ五つ半にもならぬに賣切れたり。錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こ

五つ半
午前九時

饗庭篁村
名は與三郎
竹の屋主人と
も號した
小説家
大正十二年
年六十九
年六十九

けつまろびつ翁の宅に來り、亭主を搔きのけて女房まかり出で、「有難い」を數千遍のべて、「いかにも先生は生神様なり」と、今度は神あしらひにしつゝ、悦びかへりけりとぞ。翁が醉餘の戲、よく枯骨に膏すといふべし。

(饗庭篁村—雀踊)

二三 藪 入

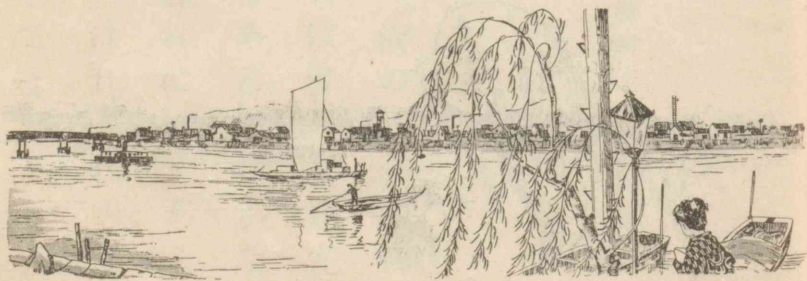
朝淺草をたちいでて
かの深川を望むかな
片影涼しわれは今
こひしき家に歸るなり

籠の雀のけふ一日

いとまたまはる藪入や
思ふまゝなるわが身こそ
空飛ぶ鳥に似たりけれ

大川端を來て見れば

帯は淺黄の染模様
うしろ姿の小走も
うれしきわれに同じ身か



柳の並木暗くして
墨田の岸のふかみどり
漁り舟の艚の音は
靜に波にひゞくかな

白帆をわたる風は來て
鬢の井筒の香を拂ひ
花あつまれる浮草は
われに添ひつゝ流れけり
潮わきかへる品川の



島崎藤村
名は春樹
詩人
小説家

曾呂利新左
衛門
和泉の人、靴
師であつて茶
事・和歌に長
じてゐた

沖のかなたに行く水や
思は同じかはしもの
わがなつかしの深川の宿

(島崎藤村―藤村詩集)

二四 太閤と曾呂利

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤、汝の姓名は何と申すぞ。と問はせけるに、其の者、臣が姓名は曾呂利新左衛門と申し候と答ふ。太閤、はて奇な姓もあるものかな。して、其の曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもあるかと問はせけるに、また答ふるやう、聊かいはれこれあり候。別儀にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして、そろりと入り、

敢てつかへず、こゝを以て曾呂利と申し候」と言ふ。太閤、「こは奇なり。また折節來るべし」と言はる。他日又太閤に謁しけるに、太閤、汝の姓名は何と申したる」と問ふ。答へて曰く、曾呂利曾呂利、新左衛門新左衛門」と太閤怪みて其の重言を尋ねけるに、新左衛門、殿下曩に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て答へ候なり」と言ふ。新左衛門或時太閤に對ひ、願はくは一日御耳の香を嗅がせられたし」と言ひければ、太閤は訝しく思ひ、こやつ又何をかなすらんと疑はれしが、よし、汝がよきに嗅ぐべし」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤

の耳元に口寄せて何やら言ふ體なれば、皆々心中ひそかに驚き、かやつ何をか言ふらん。若しや我を讒言するものにあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛を得たれば、其の言ふこと御用ひあらんも測られず」と憂ひ、各、わが屋敷に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、ひそかに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集りければ、太閤の御前に出でて謝して言ひけるやう、殿下一日の御耳を拜借し、其のかぐはしき香を嗅ぎたる效能によりて、金銀財寶山の如く集り來りて、殆ど坐する餘地これなく候。これ全く殿下の御耳の效能なり」と言ひければ、太閤もまた呆然として驚かれけりとなん。

又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗る其の效ありける程に、太閤の、何なりと汝の望まんものを取らせん」とありけるに、新左衛門言へるやう、「臣敢て大いなる望もこれなく、たゞ紙袋二個程米を賜はりたし」と言ふ。太閤「そはいとゞ易きことなり。餘り寡慾ならずや」と仰せありけるに、新左衛門「これにて澤山なり」と申して退出せしが、やがて二個の紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來りて、太閤の御前に出で、「前日御約定の米、これに賜はりたし」と、米倉二戸前を蓋ひたりけるにぞ、さすがの太閤もこれに呆れて、暫しは言葉もなかりけり。又太閤嘗て金銀の蟹を數多造らせ、これを庭の泉水或は

其の近傍に放ちてたのしみとせられけるが、程經て見飽きたりとして、近習の者に、「何ぞ一用を言出づる者には之を與へん」と申されけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣は之を紙押になさん」と言ひ、或は、「臣は金の茶釜の蓋もなければ、せめては之を以て其の蓋のつまみになさん」と言ひ、或は何と言ひ、かと言ひて、各、一個を賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、「臣は人間の相撲も既に見飽きしことなれば、此の蟹を集へて、相撲を致せんと存ずるなり」と言ひければ、太閤、相撲とありては、五個や十個にては其の興薄かるべし。悉く持行くべし」とて、残れる蟹を皆新左衛門に與へられけりとなん。

(湯淺元禎—常山紀談)

湯淺元禎
號は常山
岡山藩士
天明元年
年七十四
歿

二五 木村重成の妻

影にそふ形のごとく亡き靈も

君を守りて離れざりけむ

茶臼山
大阪四天王寺
の西南

夏の陣
元和元年
(一三七〇)

茶臼山の和議、いかでか永へに平和を保たんや。これ元より一時の權謀に過ぎず。軍馬を休めしも東の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。關東の寄手大舉して大阪城を圍む。故太閤の餘徳を偲びて參集せしもの數萬騎に及べども、譜代の士少なくて、多くは只これ烏合の勇士のみ。

去年
慶長十九年
(一七九四)

去年の十二月十九日、和議の御誓文御取交しの使として、

木村重成

豐臣秀頼の臣
夏の陣に河内
國若江で戦死
した
元和元年歿、
年二十一

今福
攝津國東成郡
今津江町と
改稱した

主命を辱めず、而も其の威風關東武士の膽を寒からしめ、尙老將家康をして感涙の袖を絞らしめたる木村長門守重成の妻は、眞野豊後守頼包の女なり。容姿の美にも彌増し、心優にして操いと高し。昨日今日、夫の氣色常に變りて、食事さへ斥け、深き思案に打沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向ひて、「去年今福の合戦に、君の功名の大なりしには、關東五十萬の大軍も驚けりと傳へ聞き侍る。今豊臣氏の武運は朝暮に迫れり。日頃の御高恩に報い奉るは今日なり。然るに何とて物思はしげにして、食事をさへ斥け給ふぞや」と問ふ。重成莞爾として打笑み、御身の訝しむも理なり。こは餘の儀

にあらず、五穀胃に入りて、二十四時を経ざれば消えずと云へり。今は何時討死するか圖り難し。されば穢き物を斥けて潔き心を出さんのみと。夫人これを聞きて、欣然として退く。

翌朝起出づれば、こは如何に、夜半の嵐も吹かなくに、難波の春に先立ちて、散行く梅の花一輪、我と我が喉搔切り、見事に自害して夫を勵ましたり。重成且驚き且悲しみつつ、妻の遺書を見れば、水莖の跡鮮かに、

一樹の蔭一河の流、これ他生の縁と承り居り候が、さてをもと、せの頃ほひ、偕老の契をなしてより、只影の形に添ふが如く思ひ參らせ候に、此の頃承り候へば、此の

世かぎりの御催の由、蔭ながら嬉しく思ひ參らせ候。

唐の項羽とやらんは、世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名残を惜み、木曾義仲は松殿の局に別を惜みきとかや。されば世に望窮りし妾が身にては、せめて御身の御在生中に最期を致し、死出の道とやらんにて待ちあげ奉り候。必ず、秀頼公多年海山の鴻恩御忘却なき様、頼み上げ參らせ候。あら、かしこ。

妻より

長門守重成様

さても健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成の心は、妻の自殺に因りてます、固く愈奮ひぬ。

項羽 名は籍、楚の
人、劉邦と戦
うて敗死した
虞氏 項羽の妾
木曾義仲 源爲義の孫
松殿の局 關白藤原基房
の女、此の事
は源平盛衰記
卷三十五に在
る

海上龍子
歌人

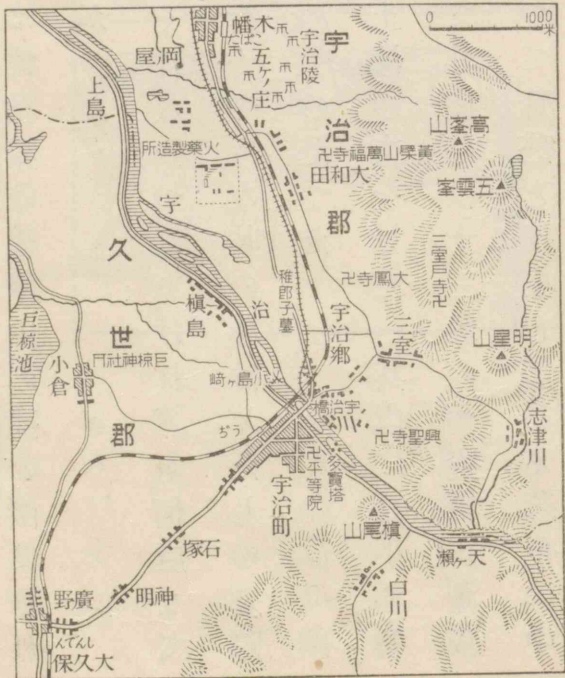
元和元年五月六日、今福の合戦に、一騎當千と聞えし剛の者木村重成も、遂に安藤某の手に首は渡しぬ。若木の櫻は散りても、髻の中の蘭麝の薫は永へに世に匂ひて、今に滅せざる天晴床しき重成の最期と共に並び稱へらるゝは、其の妻の最期なり。時に重成二十一歳、妻は十八歳なりき。

(海上龍子―たのもしき婦人)

二六 宇治川の千鳥

宇治の宿屋に着いた時はもう日が暮れかけてゐた。わたしたち五人の同勢は、河に臨んだ部屋をと望んで、二階の一番はしの廣間に通された。

薄暮の宇治川は美しかつた。いつも多いと聞いてゐる水量は、満ち溢れるやうに汪洋と流れてゐた。琵琶湖を出てから七里、幾度か溪谷の間を曲折して來た此の川は、此處で始めて平野を得た喜びを樂むやうに、兩岸の遠く開けた間を寛潤自在の趣を持つて流れてゐた。それに、漸く後しざつて行くやうに、岸を離れて行つた小



本山
萬福寺
隱元和尚の開
基

郷國
甲斐

さな山の圓く柔な線を持つた形も、わたしには穩かな感じを與へた。その一つに黄檗宗の本山のおんぼくしやう萱の微にそれと指點される眺もよかつた。

しかし水は、大して清くはなかつた。けれども、何處までも暢びやかに流れて行くやうな其の趣は、わたしの郷國などでは到底見られぬものだつた。

わたしは目を轉じて上流の方を見た。其處には小さな浮島があつた。そして其處には十三級の多寶塔が、蘆荻の上に屹然と高く立つて、蒼茫と搖曳してゐる暮色の中から水の流を監視してゐるやうに見えた。

「佐々木梶原が先陣を争つた所は何處ですか。」

わたしは傍に立つてゐたT氏に訊いた。

「あれは」とT氏は下流に架つてゐる長い宇治橋の方を指

さしながら、

「あの橋の下流

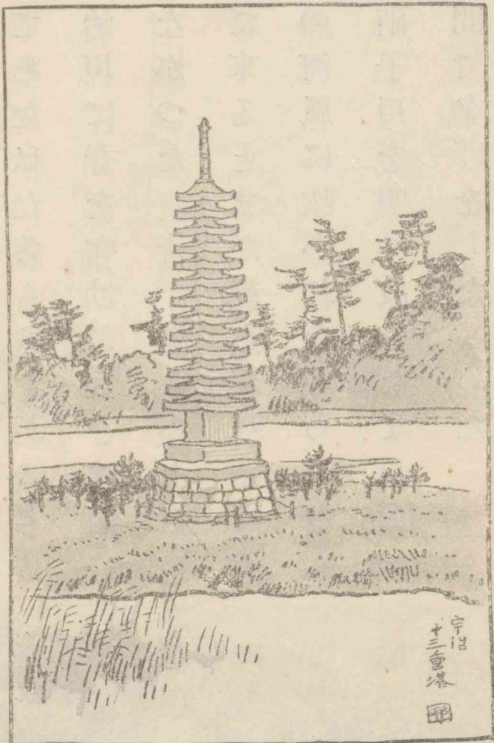
二三町の所に

ある、小島が崎

といふところ

だよ。」

「さうですか。」



宇治
十三重塔

わたしは書物で讀んだ歴史上の興味が、實際の其の地に臨むと、また別様な新味を持つて來るのを覺えた。

其の日奈良から法隆寺の方
を歩き廻つて、かなり疲れ
てゐた私たちも、さすがに宇
治川に脊を向けようとはし
なかつた。皆が湯から上つ
て來ると、まだ幾らか寒い夜
の河風に吹かれながら、縁の
硝子戸を明け放したまゝ、廣
間で夕げをしたゝめた。
ふと、ちゝゝといふ音が川
の方から聞えて來た。

宇治橋

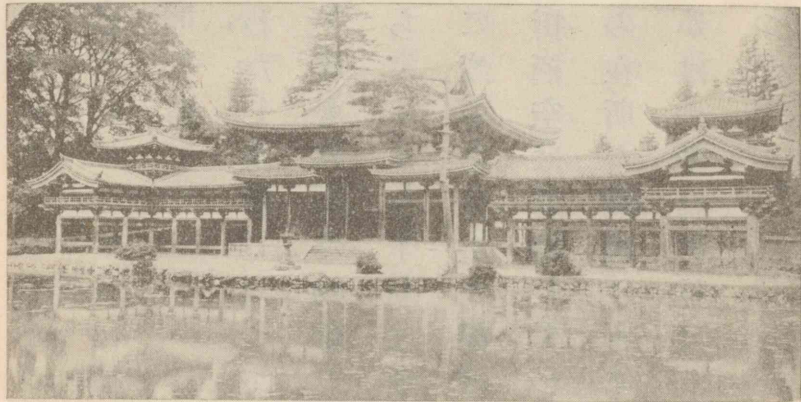


「千鳥だ」

かういつて、T氏は欄干の方へ出て行つた。

「千鳥」

わたしも直ぐ立つてT氏の後に續いた。A氏もK君も
Y君もみんな物珍しさうに立つて來た。
ちゝゝと千鳥はまた啼いた。川の上をあちらこちら
に渡ると見えて、聲は遠くなつたり近くなつたりした。
折柄空は眞暗に曇つて雨催ひであつた。闇の中の千鳥
の在所を何處と知る由はなかつたが、しかし朗かに啼き
かはす千鳥の聲は、しみとと旅情をそゝるに十分であ
つた。



平等院鳳凰堂

「いつもこんなに啼いてゐるかい。」
 「え、毎晩啼いてゐます。」
 「さうかい。ずるぶん澤山で啼いてゐるやうだが、それでゐて、ちよつともうるさくはないね。」
 「たまらないね。」
 A氏は甲高い聲で、本當に感に堪へぬといふやうに言つた。
 みんなは、やがてまた元の座に戻つたが、千鳥の啼く音を待つやう

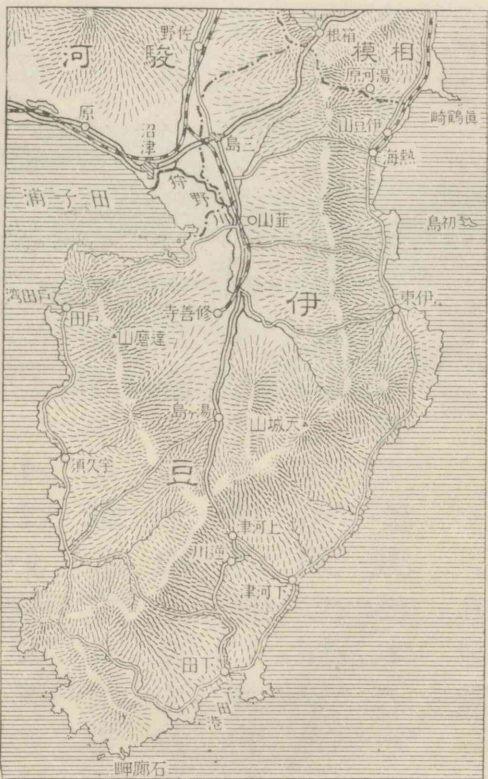
三位頼政 源氏以仁王討滅の軍を起し、平等院で戦死した。
 平等院 天台宗の寺、始め山莊であつたのを藤原頼通が永承七年に寺とし、前田晁文學者

な気分になつてゐた。其の夜は、みんな千鳥の聲に耳を欹かたむてながら目覺めてゐた。殆ど夜もすがらを千鳥の聲に起き盡したといつてもよい位であつた。
 翌くる朝は、春雨が霏々と降つてゐた。宇治は濛々と煙つてゐた。さういふ中をわたしたちは、扇の芝に三位頼政の自刃した跡をしのび、平等院に關白頼通の豪華の跡を語りもしたが、しかし宇治川の印象かんじとしては、やはり千鳥の聲に一番鮮かな感じが残された。 (前田晁「遠望」)

二七 伊豆半島 その一

イタリヤと云へば、何人でも直に、氣候温暖、天氣晴朗、四季

を通じて花笑ひ鳥歌ふ好風光を思ひ浮べる。また王霸
千年の遺跡の聯想が起り、英雄豪傑・詩人・畫家・彫刻家等の



追懷が生じて、
一種云ふべか
らざる感興が
喚起される。
元來イタリヤ
はヨーロッパ
の南端に突出
する一大半島であつて、北の一方はアルプの雪峯が城壁
のごとく之を固め、他の三方は海波に洗はれてゐる。そ

アペニン
全長約八〇〇
哩、最高峰
は海拔九
五九三呎

ナポリ
ナポリ州の首
都、ナポリ灣
に臨み、風光
絶麗、人口
約七十五萬

天城山脈
箱根から來て
南方に走り、
南に賀茂二郡
に互る、海抜
四二九〇尺、
別稱狩野山

して紫色なアペニン山脈は全半島を縦斷し、到る處に温
泉があり洞窟がある。冬もなほ温かであつて、國都ロー
マは新年の平均温度が華氏四十七度、南端のナポリは同
じく四十五度乃至五十度の間を昇降してゐる。美しい
色の蜜柑は、累々として梢頭に實つてゐる。歐洲中原の
人々が、此の明媚な南國の風土にあこがれるのも無理は
ない。

伊豆はイタリヤと同じく、南方に突出した一大半島であ
つて、北の一方は富士の雪峯が城壁の如く之を限り、他の
三方は海に面して、紫色の天城山脈は全半島を縦斷し、温
泉は數十箇所から湧き、洞窟は海岸いたる處に多く、氣候

熱海 田原から五里、三島
伊東 田原から七里
五里 熱海の南海

は外伊豆の熱海、伊東に於て、正月の平均温度が四十七度、即ちローマと同一であり、東岸の河津は同じく四十八度半、外浦の宇久須では四十八度、即ちナポリと殆ど同一である。

毎年元旦の頃、東京では寒冷雪を催す習であるが、伊豆へ行けば、楊は赤い芽を吹いて居る。枇杷は雪の如くに咲いて居る。梅の白と椿の紅とは相映發して居る。其の下に南天は紅珊瑚の珠を綴つて居る。蒿雀アウゾウが其の實を啄きに來る。頬白も負けじと飛んで來る。柚子と橙とは梢に残つて居る。まして近年は、ネーブル蜜柑の香ばしい實さへ、枝もたわゝに生つて、一入イタリヤの面影が

吉田松陰 長門萩藩士、幕末の志士、安政七年歿、年二十九

添はつて來た。伊豆は源頼朝勃興以來、鎌倉幕府、足利管領、後北條氏と、相次いで國史の舞臺となり、近くは吉田、松陰が外船投航の事蹟に至るまで、地文と云ひ歴史と云ひ、如何にもイタリヤに酷似して居る。

イタリヤが、北部の口イタリヤと南部の奥イタリヤとに分れて居る如く、伊豆では、天城の嶺北を口伊豆と云ひ、嶺南を奥伊豆と呼ぶ。殊に口伊豆には名所舊蹟が多く、一列擧するのに堪へない。幸に是等の數多い史蹟は、狭い範圍、短い距離の間に、しかも時代の相隔つたまゝに隣接してゐる。これもイタリヤに遊んで、到る所名所と史蹟と相重なつて、應接に遑いとのないのを見るのと同一の趣

がある。

二八 伊豆半島 その二

近世に於て、最も狭い範圍、最も短い距離の間に、日本歴史の重要人物を輩出したのは、鹿兒島市の下加治屋町を第一に推す。即ち西郷南洲も、大久保甲東も、明治維新以來の長者吉井友實伯も、西南の亂の俠將村田新八も、日露戰役の大立物たる海軍の東郷、陸軍の大山、黒木、何れも皆この掌大の地に生れた。是等の人々は、それ〴〵に近世史の英雄であるが、併し王政維新以來の功臣と云ふだけに限られてゐる。史蹟と云つても、單に誕生の記念と云ふ

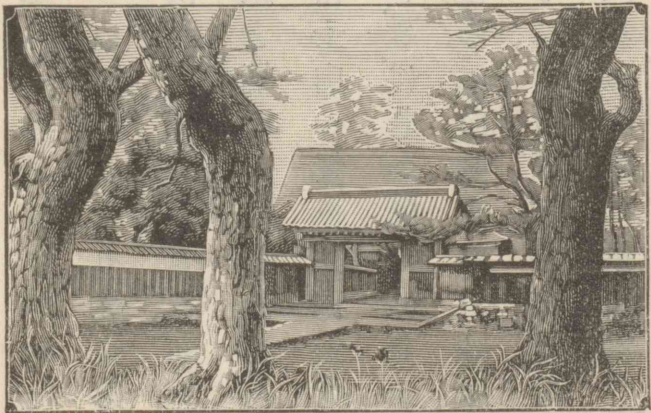
西郷南洲 名は隆盛、明治維新の功臣、明治十年戦死、明五年五十一歳
大久保甲東 名は利通、明治維新の功臣、明治十一年暗殺された、年四十九
吉井友實 樞密顧問官、明治二十四年歿、年六十四
村田新八 南洲と共に城山で戦死した
東郷 名は八郎、伯爵、海軍大將、元帥
大山 名は巖、公爵、陸軍大將、元帥、大正五年歿、年七十五
黒木 名は爲楨、伯爵、陸軍大將、大正十二年歿、年八十二

芙蓉八朶 銀が峰、馬背、嶽、雷電、嶽、釋迦が嶽、藥師嶽、觀音嶽、經嶽、駒が嶽
葦山 田方郡・三島町の東南二里餘
江川家 江川太郎左衛門(坦庵)の家
白河樂翁 松平定信、田安宗武の第七子、松平定邦の嗣、白河城主、文政十二年歿、年六十二
谷文晁 江戸の人、畫家、好んで富士山を畫いた、天保十二年歿、年七十八

だけで感興が浅い。然るに伊豆はイタリヤの如く、いろ〴〵な歴史的事件と人物とで深く人の興味を動かす。口伊豆に入り、先づ第一に北を望めば、芙蓉八朶の富士山が、天空を衝きながら吾等の面に追つて来る。其の莊嚴と端麗とは、覺えず人をして襟を正さしめる。昔から富士山の景色は、富士見十三州の中、口伊豆を第一等と仰ぎ、殊に其の隨一は、葦山にある江川家裏門からの眺望である。白河樂翁公は海防檢分として、豆相地方を巡回するに當り、畫家谷文晁を伴なつて山海を寫生せしめた。文晁は生涯に幾百度となく富士を見たが、此の門からの眺望こそ天下第一等で

日蓮上人
安房の人、日蓮宗の開祖、弘安六年歿、年六十二

ある」と叫び、此處に在つて山を寫し、自ら寫山樓と號した。江川邸は保元年間に建造されたもので、日本國中で最も古い住宅建築の一つである。自然生の立木を中心の大黒柱として、數百の梁を架し、鉤のない時代とて、割板江川のまゝ普請してある。日蓮上人が親ら書いて贈つた火難除の護符は、今に梁の上に藏めてある。苟も日本往時の建築を知らうとする者は、一度其の邸宅を參觀すべきである。



伊勢長氏
北條早雲、武將、應永二十六年歿、年五十二

北條氏規
北條康の第四子、氏政の弟

蛭小島
葦山町大字寺家の東、今田となつてある

山木判官
關兼隆、山木の目代、清盛の同族であつたので、暴威を振つた

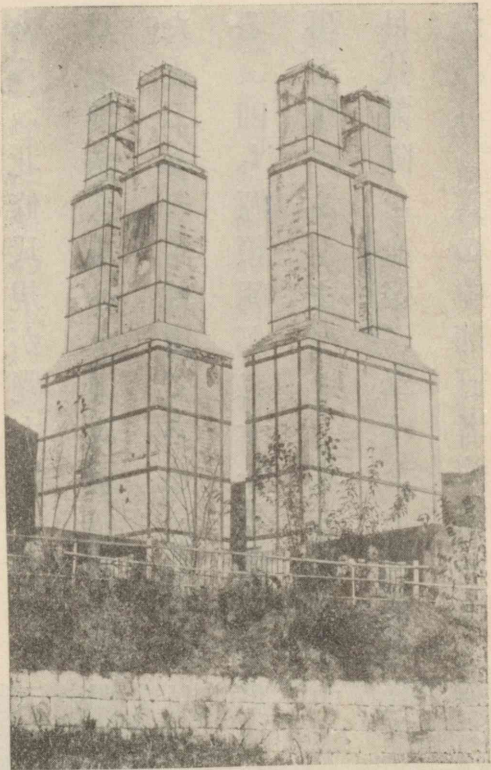
修善寺
田方郡狩野川の左岸

時政
北條氏第一代の執權、建保三年歿、年七十九

江川邸の背面にある一小丘は、葦山の古城址である。伊勢新九郎長氏が創築して、關東八州を平げたのも此處である。北條氏規が、豐太閤の率ゐた天下の大軍を、一百餘日の間防ぎ支へ、小田原城の落城を聞いて始めて開城したと云ふのも此處である。葦山城址の下は蛭小島である。即ち源頼朝が二十一年隱忍の舊蹟であつて、其の大事を擧げるや、まづ近く北方にある山木判官の館を襲ひ、目代兼隆を血祭に擧げた。修善寺温泉にも數多の古跡がある。其の中、蒲冠者範頼の墓と稱へるものは、眞偽は疑はしいが、鎌倉二代將軍頼家の墓は正確なものである。二十三歳を一期として、時政の術策に陥り、此處に空しく

芳魂を留めたかと思へば、何人も杖をとどめてそらるに昔をしのばずにはゐられない。

鳴瀧
葦山の東南



鳴瀧の清い谿
水の畔、大きな
反煙突が三つま
射で空に聳えて
見える。是は
日本近世史上
の一英雄江川

江川太郎左衛門
名は英龍、號
は坦庵、葦山
の代官、安政
元年歿、年六
十五

太郎左衛門の設計に依り、其の子及び門弟が、始めて近世式の大砲を鑄た反射爐である。江川師弟はオランダの

水道橋
東京市小石川
區に在る

達磨山
田方郡、伊豆
半島西北の高
峰
ブーチャチ
嘉永六年に我
が國へ來た

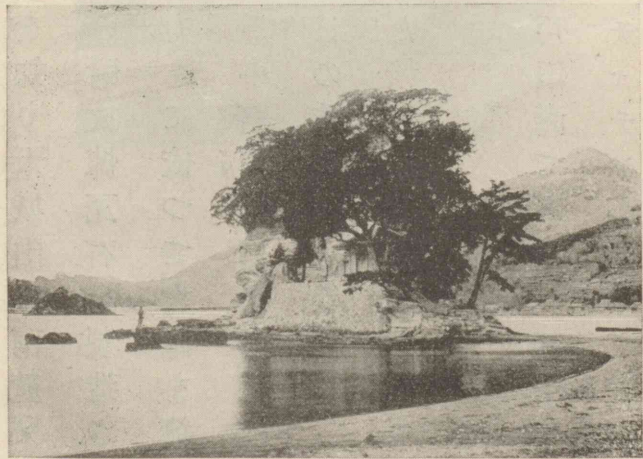
書に據り、鐵を鎔かすのには、大形の白燒煉瓦石、即ち耐火性のものを用ひねばならぬことを知り、天城山の南麓梨本及び逆川^{サカガハ}の土を採り、本邦最初の耐火煉瓦石を製造させ、之を以て築いた爐と、鳴瀧の水力とに依つて、大砲を鑄造した。此の大砲鑄造所は、後、江戸小石川關口から、更に水道橋の水戸邸跡に移り、遂に今日の造兵廠となつた。それ故、日清、日露二大戦役に用ひた精銳な武器の製造も、濫觴は此處に在つたのである。

修善寺から、西、達磨山を越えれば、戸田灣である。五十年前、露國軍艦ディアナの艦長ブーチャチンが、始めて我が國で西洋形の船を建造した處である。

湯河原温泉
相模國足柄下郡土肥村三田原の南約三里
伊豆山温泉
伊豆國賀茂郡熱海の東北二十五町

下田
賀茂郡、伊豆國の極南
嘉永
孝明天皇の年號(三〇八―三二)
安政
同前(三二四―三五九)

伊豆相模の境上に在る箱根温泉十二湯、湯河原温泉、また熱海温泉、伊豆山温泉などは、世の人の熟知する所である。併し伊東温泉の北端に在る一谿、流湯川の口は、三百餘年前徳川家康が、メキシコ航行の船を建造せしめた稀有の遺跡である。ことをも記憶せねばならぬ。天城嶺を越え、奥伊豆に入れば、其の極端近くに下田がある。嘉永から安政年間に互り、英露佛米の軍艦が交入港する



下田 柿崎 辨天

石室崎
賀茂郡、伊豆極南の岬

志賀重昂
號は別川
地理學者
昭和二年歿、
年六十五

四人
前野良澤
小杉玄白
中川淳庵

こと十六回、吉田松陰が米艦に乗組まうとして挫折したのも此處である。松陰は延いて惜しい刑死を遂げるに至つた。伊豆の最南端は即ち石室崎である。此處の一年平均温度は六十三度で、ローマのは五十四度である。即ち南伊豆はイタリヤの大概の地方よりも暖かである。英佛獨の人士は、冬になれば、「イタリヤ、イタリヤ」と憧れて行く。しかも日本のイタリヤは、我が國都から四時間の手近い處にあるのである。
(志賀重昂「續山水圖説」)

二九 蘭學事始

四人は、平河町の良澤の家に月五六回づつ相會した。良

澤を除いた三人は、オランダ文字の二十五字さへ、最初は定かには覚えて居なかつた。

良澤は、三人の人々に蘭語の手ほどきをした。彼はさすがに長崎へ留學したことがあるだけに、多少の蘭語と、章句・語脈のことも少しは心得て居たけれども、それも殆どいふに足らなかつた。一月ばかり経つと、良澤が三人に教へることは、もう何も残つて居なかつた。

三人の手ほどきが済むと、四人は初めてターヘル、アナトミアの書に向つた。

が、開卷第一の頁から、たゞ茫洋として、舵なき船の大洋に乘出したやうに、何處からとも手の付けやうがなく、あき

ターヘル、
アナトミア
人體解剖圖

れにあきれて居る外はなかつた。

が、二三枚めくつた所に、仰向けになつた人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體内景のことは知りがない



前野良澤

が、表部外象のことは、その名稱も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と説の中の符號とを合せ考へ

ることが一番取付き易いことだと思つた。

かれらは、眉・口・唇・耳・腹・股・踵などに附いて居る符號を、文章のなかにさがした。そして眉・口・唇などのことばを、一つ

一つおぼえて行つた。
 が、さうした單語だけは分つても、前後の文句は、彼等の乏しい力では、一向に解し兼ねた。一句一章を、春の長き一日考へあかしても、彷彿として明らめられないことが屢あつた。四人が二日の間考へぬいて、やつと解つたのは、「眉とは目の上に生じたる毛なり」といふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘嬉し涙の眼の中ににじんで來るのを感じずには居られなかつた。
 眉から目と下つて、鼻の所へ來たときに、四人は、「鼻とはフルヘツヘンドせしものなり」といふ一句に突當つてしま

つて居た。

無論、完全な辭書はなかつた。たゞ良澤が長崎から持歸

つた小冊子に、フルヘツヘン

ドの譯註があつた。

それは、「木の枝を斷ちたる後、

そのあとフルヘツヘンドを

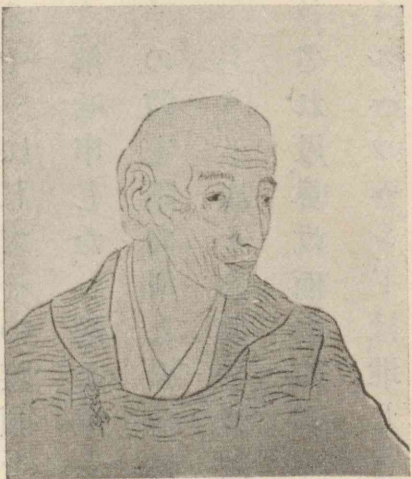
なし、庭を掃除すれば、その塵

土あつまりて、フルヘツヘン

ドをなす」といふ文句だつた。四人は、その譯註を引合せ

ても、容易には解しかねた。

「フルヘツヘンド、フルヘツヘンド」。



杉田玄白

三〇 蓮の花

八月二十七日、正午。晝飯の卓についてゐると、不意に、門のところから大きな白い蓮の花が一本歩いて來た。おやと思ふうちに、その下から子供の頭があらはれて來た。蓮の花があまり大きいので、子供の頭は猶さら小さく見える。見てゐると、その頭がくるりと此方を向いた、顔ぢゆうが笑つてゐる、三郎公サッラウキョウ（五歳）だ。

三郎公が、今や眞盛りの白い蓮の花を持つて來てくれたのだつた。三郎公は泥まぶれになつた兩方の手で、一所懸命に、自分の頭より大きな蓮の花を高く捧げてゐる。

三郎公は縁側の下から延びあがらうとするが、身體が小さいので顔から上だけしか見えない。その顔も又泥まぶれになつて、その上水鼻汁ハナノシヅメまでたらしてゐる。顔ぢゆう



蓮 花

うの笑がくづれると、澄して、また、白い蓮の花を高く捧げた。そしてその花のすゝやかな一瓣でも落すまいとする精一杯の努力が、ます／＼彼の可憐な口元を引締める

らしく見える。全く思慮と意力に富んだ大人の口元である。その大きく見張つた黒い眼、それは無邪氣と愛とに満ちてゐる。そして「これいゝ花だらう、いゝものを持つて來たらう、見ておくれよ」といふ得意と満足の微笑が、その眼の底から現れる。それはいゝものと信じてそのいゝものを人に與へ得る聖者の心である。外になんにもない、純眞まじりけなしである。何しろ、三郎公は一所懸命だ。見えこそしないが、彼のいたいけな兩足は、恐らく庭の地面に力一杯ふんばつてゐる事であらう。顔が上氣したやうに生々と紅みさして來た。そのいき／＼とした顔。蓮の花はかすかに揺れてゐる。

葛飾
東京市の東
郊、江戸川の
下流地方

葛飾の夏の眞晝間である。澄みわたつた太陽の光は庭の泰山木の厚葉を透かして、鮮かな緑色の光線を投げかけてゐる。蓮の花の上に、そして子供の頭の上に、そして光線と一緒にそれらが幽かに揺れる。子供の頭が緑になり、眼に見えぬ後光が子供の全身から溢れ漲り、それも緑に燃上るかと思はれる。

三郎公は黙つて、ます／＼花を高くさし上げた。葉もなんにもないたゞ一本の蓮の花を。

「いゝ花だねえ、三郎公。いゝものを持つて來てくれたねえ」と、私は早速聲をかけた。「ほんとにいゝ花だこと、三郎ちゃん。」妻も私と一緒に箸を置いた。そして二人で

縁側へ出てその花を受取ると、三郎公はほつとしたやうに、それを手放して、はじめて鼻汁をすゝつた。

「三郎公、何處に咲いてゐた」と私がたづねると、「うん」と云ふさうして白い眼を見はつた。

「何處から取つて來たの三郎ちゃん」と妻が改めてきいて見る。

「うゝん俺のうちのだ」と少からず不満らしい。さうだ、さうだ、三郎公の家には掌ほどの溜池があつた。肥料溜のうしろのあはれなどぶ泥のなかにも、時節が來ると白い蓮の花もほのかに咲いたに違ひはない、私が悪かつた。お前はお前の家の溜池に、正に足をふみ込んで、この花を

取つて來てくれたに違ひない、私が悪かつた。「有難うよ、ほんとに有難う。」私は心から感謝した。私の妻も兩手に戴きながら言葉を盡して感謝した。何といふ尊い贈物だ。貧者の一燈といふ事はあるが、これは一層清淨で、より以上に無心である。悔恨も無ければ懺悔も無い。もとより釋尊の足元にひれ伏して、新に歸依隨順の涙を流した信心者の心では無い。子供は生れながらの佛である。三郎公はまだ赤ん坊である。その赤ん坊が、自分を愛してくれ、自分もまた好きな隠居所の先生のために、自分の好きな花を持つて行つてやらうとおもつて持つて來てくれたのである。三郎公は、自分の好きな花はや

生
白秋のこと
隱居所の先

はり先生も好きであるに違ひない、持つて行つたら嬉しがるであらう、どんなに嬉しがるか知れない。たゞそればかりである。私達がしみじみ禮を云ふと、三郎公はにつこりした。そして今さら極りの悪いやうな顔をして「ふゝん」と鼻を鳴らす。「いゝ兒だ、なにを上げようねえ」と云ふと、「要らないよ」と云ふ。「まあお待ち、何かあるでせう。」私が目くばせするまでもなく、妻は蓮の花を捧げたまゝ立ちあがつた。そして戸棚などを探してゐたが引返して來ると「あなた、けふは何にもごさいませんの、三郎ちゃん困つたわねえ」と濟まなさうな顔をする。「さうかい、それはいけないな。」——貧しい二人の生活が思はず顧

みられる。何か買つてやらうにも、今日は一文なしで、この無心な子供にさへも、十分には禮をする事が出來ないと思ふと寂しい。私はたゞその兒の頭を撫でてやり、妻はその兒の水鼻汁を拭いてやつた。そして私はその兒に詫びた。——「三郎公、けふは何にも上げるものがなくて濟まなかつたな。また上げようね。」
「要らないよ」と三郎公は云棄てて勢よく門から飛出して行つた。さうだ。あの兒には何にも要らなかつたのだ。あの兒が一本のこの蓮の花を持つて來てくれた心持には、もとより何の報酬も豫期してゐる筈はなかつた。彼には純眞無垢な愛があるばかりである。酬無くして人

北原白秋
名は隆吉
詩人

に與ふる心。それは私のやうな大人にはなかなか出来る事ではない。大人の愛はいよゝゝ汚れてゆく。白い蓮の花は早速床の上の壇に挿す事にした。花が大きいので壇が倒れさうになる、やつと紅表装の軸の下に安定させる。花が靜に薰り出した。

(北原白秋—螢の指輪)

昭和女子國文讀本 卷三終

第二學年 小田豊子

小田豊子

大正七年九月廿八日發行
大正十二年一月廿二日發行
大正十四年八月十日發行
昭和三年十二月五日第三修正版訂正印刷
昭和三年十二月十日第三修正版訂正發行

| | | |
|-----------|-------|--------------|
| 卷數 | 定價 | 昭和五年 臨時定價 |
| 一・二・三・五・六 | 金四拾五錢 | 各金七拾參錢 |
| 四 | 金四拾六錢 | 金七拾五錢 |
| 七 | 金四拾七錢 | 金七拾七錢 |
| 八 | 金四拾八錢 | 金七拾九錢 |
| 上級 | 金四拾九錢 | 金七拾九錢 |
| 上 | 金五拾錢 | 金七拾九錢 |
| 下 | 金五拾一錢 | 金七拾九錢 |

著者

保科孝一

東京市外野町字大塚一六二五番地

發行者

合資會社 育英書院

東京市牛込區白銀町二十九番地

右代表者

倉田八十八

東京市神田區錦町三丁目十七番地

印刷者

白井赫太郎

精興社



發行所

東京市牛込區白銀町二十九番地
振替口座(東京)七四二番
東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

育英書院
目録書店

